

2013 年度 JLP 新カリキュラム報告

ICU 日本語教育課程

JLP は、2013 年度秋学期にカリキュラム改革を行った。改革の趣旨、経緯、改革内容の要点は田中（2014）に詳しいが、コース運営上の大きな変更はコマ数の減少である。2012 年度までの J コース週 10 コマから週 8 コマ（2 コマ減）、集中日本語コースは週 20 コマから週 15 コマ（5 コマ減）になった。それにともなって時間割も大きく変更になった。

本報告は、改革された新カリキュラムで行われたコースの内容に関する報告として（1）授業の流れと内容（2）学習支援の方法（3）学習評価（4）課題の 4 つの観点からまとめたものである。2013 年度秋・冬学期に開講されたすべてのコースについて扱っているが、内容に関連の深い初級、中級、上級、日本語特別教育の 4 つのグループごとにまとめ、また初級中級の両方にまたがる集中日本語 B と初めて開講された J7 についてはやや詳しく解説している。

各グループの初めに、そのグループに共通の時間割、単位数と、そのグループの目標（コースオファリング掲載のもの）を記し、続けてコースごとの報告を掲載した。

初級から上級および日本語特別教育の別なく、プログラムに共通する要素として、成績評価の基準がある。2012 年度より次に示す評価基準を採用し、コースごとにそれぞれの授業内容を鑑みて調整をしたうえで決定している。

期末試験	45%
中間テスト	25%
クイズ	10%
タスク・宿題	20%

参考文献

田中和美（2014）「JLP 改革—新カリキュラム 2013 年秋から実施—」『ICU 日本語教育研究 10』国際基督教大学日本語教育研究センター 43-51

初級コース

初級のコースは「日本語 J1」「日本語 J2」「日本語 J3」「集中日本語 A」の4コースであり、さらに初級と中級にまたがるコースとして「集中日本語 B」がある。

1. 時間割と単位

JコースのJ1、J2、J3の時間割を表1に、集中日本語コースの時間割を表2に示す。J1、J2、J3のコースは週8コマ5単位、集中日本語コースは週15コマ10単位である。それぞれのコースのコマ数のうち、1コマを個別指導としている⁽¹⁾。

表1 初級のJコースの時間割

網掛けのコマが授業時間

	月	火	水	木	金
1限					
2限					
3限					

表2 集中日本語 A、B のコースの時間割

網掛けのコマが授業時間

	月	火	水	木	金
1限					
2限					
3限					
4限					
5限					

2. コースの目的

コースオファリングに掲載したそれぞれのコースの目標を表3から表5に示す。集中日本語 A のコース目標は J2 と、集中日本語 B のコース目標は J4（中級コースの報告を参照）と同等である。

表3 日本語 J1 コースの概要と目標

コース概要: 日本語を初めて学習する学生のためのコースである。聞く・話す・読む・書くの基本的なスキルを身に付け、日常生活における自身のことや身の回りのことについて、正確かつ適切な言語活動が自発的にできるようになる。

コース目標:

コース終了時まで、日常生活における自身のことや身の回りのことについて、学

生は、
聞く：ゆっくり、はっきりと話される簡単な日常会話が理解できるようになる。
話す：日常的な場面で、相手の助けがあれば簡単なやり取りができるようになる。
読む：ひらがな・かたかなと漢字約 135 字が読めるようになる。また、短く、簡単なテキストが読め、その主要な点を認識できるようになる。
書く：ひらがな・かたかなと漢字約 80 字が書けるようになる。また、適切な文体を用いて短いメッセージが書けるようになる。

表 4 日本語 J2 コースの概要と目標

コース概要：聞く・話す・読む・書くの基本的なスキルを身に付け、日常生活において学生が他の人々と接触する場面で、正確かつ適切な言語活動が自発的にできるようになる。
コース目標
コース終了時まで、日常生活において他の人々と接触する場面で、学生は、
聞く：日常会話が理解できるようになる。
話す：身近な日常の事柄について簡単なやり取りができるようになる。
読む：漢字約 280 字が読めるようになる。また、短いテキストを読み、その要点がつかめるようになる。
書く：漢字約 170 字が書けるようになる。また、身近な事柄について簡単な文章が書けるようになる。

表 5 日本語 J3 コースの概要と目標

コース概要：聞く・話す・読む・書くの基本的なスキルを身に付け、日常生活において学生が経験するであろう社会的または公的な場面で、正確かつ適切な言語活動が自発的にできるようになる。
コース目標
コース終了時まで、日常生活において経験するであろう社会的または公的な場面で、学生は、
聞く：日常生活の中で、話し手の気持ちや意図も多少理解できるようになる。
話す：人前でメモを見ながら短い発表ができるようになる。
読む：漢字約 400 字が読めるようになる。
書く：漢字約 250 字が書けるようになる。また簡単な説明や感想が書けるようになる。

3. 教科書など

初級では『ICUの日本語』の第1巻から第3巻を使用する。ほかにオンラインで教科書の音声聞くことができる (<http://subsite.icu.ac.jp/jlp/text.html>)。『ICUの日本語』は1995年刊行の総合教科書で、文法シラバスと機能シラバスを組み合わせ、4技能を習得するようにねらって開発された教科書である⁽²⁾。

以下に「集中日本語A」「日本語1」「日本語2」「日本語3」の順に概要を記す。初級と中級にまたがる「集中日本語B」については「中級コース」の節を参照されたい。

注

- (1) 大学のコースオフリングスに記されたコースの性格としては、一つのコースの中に講義と演習のコマ数が明記されているが、初級から中・上級、日本語特別教育のすべてでコース運営上の区別をしていないため本報告では割愛する。
- (2) 国際基督教大学日本語教育課程・日本語教育研究センター(1996)『ICUの日本語』講談社インターナショナル

集中日本語 A 報告

松井 咲子

(1) 授業の流れと内容

授業数が20コマから15コマとなったが、カバーする教科書の文法項目、漢字数などの変更はなかったため、技能コマを統合するなどして時間数の調整を図った。また、集中コースも一般コースと同様に、テキストの1レッスンを7コマで指導することを基本に以下の流れで授業を組み立てた。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1コマ目：漢字（読み方）および新出語彙の確認2コマ目：フォーメーション・ドリル3コマ目：フォーメーション・ドリル4コマ目：フォーメーション・ドリル、ロールプレイ（話し方）5コマ目：漢字（書き方）、読解6、7コマ目：週替わりで作文、聴解などの技能コマ |
|---|

教材は、教科書『ICUの日本語1』、『ICUの日本語2』を使用した。技能コマについては、それぞれ自主作成の教材を用いて指導した。

(2) 学習支援の方法

上記7コマに加え、個別指導を1コマ設け、各学生10～15分程度、宿題、クイズ、作文等のフィードバックに充てた。またオンラインツール(“Quizlet”)に新出語彙を載せ、学生の自習を促した。宿題は、授業後に漢字と文法の練習問題を課した。

(3) 学習評価

1週間に1回のクイズ(漢字、文法)、中間テスト(漢字、文法、読解、話し方)、期末試験(漢字、文法、読解、作文、聴解、話し方)、作文、スピーチ等の課題、宿題の提出が評価の対象となった。各項目での評価のウエイトはJLPで定めた通りである。

(4) 課題

授業数が減ったことで良い面も悪い面もあった。プラスの効果としては、学生の学習に対するモチベーションが最後まで維持できたことが挙げられる。授業数が20コマであった昨年度までは学期末には学生の顔に疲労が見られ、途中であきらめてしまいそうになる学生もいたが、コマ数が週15コマになったことで最後まで学生は明るい顔で日本語学習に前向きに取り組むことができたと思う。また、もう一つのプラス効果としては、個別指導が挙げられるだろう。限られた時間ではあったが、各学生に適切な指導ができたと感じる。

一方で、課題も残る。まず、コマ数が減ったことで学習内容が定着しないままに次の課へ進まなくてはいけない状況が常にあった。特に聴解や話し方の運用練習を大幅に削らざるを得ず、結果、学生の聴解力、話す力が例年に比べて弱いように感じる。

また、新カリキュラムでコマ数を減らすことの狙いのひとつに、学生が自習する時間を確保し自律的に学習させるとことがあったが、学生の授業評価を見ると自習時間は平均して30分～2時間であり、週20コマ時代とそれほど変わっていない。この原因として、授業数が減ったことにより、集中日本語授業に加えて他の多くのコースを学生が履修するようになったことが考えられる。学生にしっかりと自習をさせる工夫が求められると共に、学生の履修についても指導が必要だと感じた。

日本語 J1 報告

桜木 ともみ

(1) 授業の流れと内容

2012年度までと同様、J1では教科書『ICUの日本語1』(1課～10課)の内容をカバーした。今年度より授業コマ数が週2コマ減ったこと、更に台風の影響で6コマ分の授業キャンセルがあったことから、授業内容は教科書1課分を5コマ程度で進める必要があっ

たため、基本的に以下の流れで授業を進めた。聴解・会話・作文等の総合的な技能練習については、スケジュールを調整しながら統合・短縮した形で適宜実施した。

〈J1 の基本的な 1 課分の流れ〉

1 コマ目：新出語彙および新出漢字の確認

2 コマ目：フォーメーション・ドリル

3 コマ目：フォーメーション・ドリル

4 コマ目：フォーメーション・ドリル

5 コマ目：復習と読解

※スケジュールと学生の様子に応じて、ロールプレイ・聴解・会話・作文等を適宜追加

(2) 学習支援の方法

教科書『ICU の日本語』のためのオンラインツールに加え、語彙の自主的な学習と定着を促すために各課の新出語彙リストを無料のオンラインツール（“Quizlet”）で学習できるようにし、学生に周知した。

また、各学生に対して、個別指導の時間を利用して、一人 10 分～20 分程度、宿題・クイズ等のフィードバックや質問への対応を行った。個別指導の体制は学生一人一人の状況を把握して対応できるため非常に意義があると感じたが、人数的に授業コマ内で対応できない学生が多く、授業コマ以外の時間にサインアップさせても学生のスケジュール調整がうまくいかないことや、復習やフィードバックのタイミングがずれること等が課題であった。

その他、コース初めには平仮名・カタカナの確認・復習の支援が必要な学生が複数名いたため、授業外の時間で適宜文字学習の支援を行った。

(3) 学習評価

JLP の方針に基づき、期末試験（45%）・中間テスト（25%）・宿題や発表等のタスク（20%）・文字・語彙・文法のクイズ（10%）とした。期末試験では、聴解・漢字・文法・読解・作文の筆記試験と、口頭の話し方テスト（インタビューによる）を実施した。

(4) 課題

一日の学習内容が多いこと、毎日ではなく 1 日おきに授業があったことから、積み上げがうまくできない学生が見られた。J1 のような入門クラスは、導入・練習・復習のサイクルを連続させなければ語彙や文法の定着と積み上げが難しいため、毎日少しずつ進められるスケジュールの方が効果的であると感じた。

スケジュールや進度の課題とも関連するが、全体的に学習内容の定着が課題であった。そのため、授業での工夫に加え、今後は授業外での自主学習を促す具体的な方策を検討していく必要があると考える。例えば、現在の宿題（課ごとの漢字・文法の復習）をより細かく再構成し、その日の授業内容を定着させるための学習項目ごとの復習用（ある

いは事前学習用)の自習用教材を準備する等、スケジュールと学習内容に沿った改善方法を考えていく必要があるだろう。

最後に人数に関して、2013年度のコースは学生数が20名近く、毎週の個別指導や1セッションで行う授業内で各学生に細やかな指導ができたとは言えない点が反省点として残っている。特に、J1のような入門コースの学生はまだ日本語の学習方法に慣れていないため、学生が抱える問題は学生の知識や母語等によって、文字・言語構造・外国語学習の方法等、多岐にわたる。これらの問題点は教師が様子を把握し対応できれば解決できることも多いため、J1コースでは少人数制の効果が特に期待できる。J1を少人数で実施できるようセッション数と個別指導の時間を確保することで、各学生が抱える問題の減少と学習意欲の継続につなげられると考える。

日本語 J2 報告

松井 咲子

(1) 授業の流れと内容

日本語 J1 同様授業数が7コマとなったが、カバーする教科書の文法項目、漢字数などの変更はなかった。そのため、読解、聴解、作文、話し方の技能コマを統合することで、指導内容とコマ数の調整を図った。基本的には、1週間(7コマ)で1課指導するということを基本に、以下のような流れで授業を進めた。

- | |
|--------------------------------|
| 1 コマ目：漢字(読み方)および進出語彙の確認 |
| 2 コマ目：フォーメーション・ドリル |
| 3 コマ目：フォーメーション・ドリル |
| 4 コマ目：フォーメーション・ドリル、ロールプレイ(話し方) |
| 5 コマ目：漢字(書き方)、読解 |
| 6、7 コマ目：週替わりで作文、聴解などの技能コマ |

教材は、教科書『ICUの日本語2』を使用した。技能コマについては、それぞれ自主作成の教材を用いて指導した。

(2) 学習支援の方法

上記7コマに加えて、2コマ(うち1コマは授業時間外)の個別指導の時間を設け、各学生10～15分程度、宿題、クイズ、作文等のフィードバックに充てた。またオンラインツール(“Quizlet”)に新出語彙を載せ、学生の自習を促した。宿題は、授業後に漢字と文法の練習問題を課した。

(3) 学習評価

1週間に1回のクイズ（漢字、文法）、中間テスト（漢字、文法、読解、聴解、話し方）、期末試験（漢字、文法、読解、聴解、話し方、作文）、作文、スピーチ等の課題、宿題の提出が評価の対象となった。各項目での評価のウエイトはJLPの方針の通りである。

(4) 課題

コマ数が減ったことで、技能コマの時間を削らざるを得なくなり、聴解練習が充分にできず学生の聴解力を伸ばしきれなかったことが懸念される。

授業日が1週間に5日から3日となったことで、日本語以外のコースが取れるようになり学生の選択肢が広がったことは非常に良かった。一方で、日本語学習から意識が離れる学生や、日本語学習と他の活動とのバランスが取れないことに悩みを抱える学生が以前よりも増えたと感じた。自習教材を充実させることによって、日本語の授業がない日に、学生の意識を日本語に向かせる工夫が必要だと感じる。

個別指導は非常に効果的であり今後も続ける意義は大きいと思う。一方、授業日以外に設けた個別指導は、日時の設定が煩雑になり、学生が時間を忘れるなどのトラブルもあったため、できれば全員同じ日にまとめられるとよいと感じた。

日本語 J3 報告

金山 泰子

(1) 授業の流れと内容

J1、J2と同様授業数が7コマとなったが、カバーする教科書の文法項目、漢字数などの変更はなかった。従来の時間割では、テキストのロールプレイ、漢字、読解をそれぞれ1コマずつ取っていたが、新時間割では、ロールプレイをテキストのフォーメーション・ドリルのコマに組み込み、漢字と読解を1コマで実施した。また技能別は「聞く・話す」「話す・書く」「読む・話す」のように統合して実施した。基本的には、1週間（7コマ）で1課指導するというを基本に、以下のような流れで授業を進めた。

- 1コマ目：フォーメーション・ドリル
- 2コマ目：フォーメーション・ドリル
- 3コマ目：フォーメーション・ドリル、ロールプレイ
- 4コマ目：漢字、読解
- 5コマ目：聞く・話す
- 6、7コマ目：「話す・書く」と「読む・話す」（隔週で交互に実施）

教材は、教科書『ICU の日本語 3』を使用した。技能コマについては、市販教材や自主作成の教材を用いた。

(2) 学習支援の方法

上記7コマに加えて設けられた、2コマ（うち1コマは授業時間外）の個別指導の時間は、宿題、クイズ、作文等のフィードバックに充てた。さらに、特に漢字の指導が必要な学生に対しては、個別指導（予定された時間内・時間外）を利用して、J1、J2の漢字クイズを実施した。また、教科書の音声、漢字語彙練習のウェブサイト、自習用オンラインツールを紹介し、学生の自習を促した。宿題は、授業後に漢字と文法の練習問題を課した。

(3) 学習評価

1週間に1回のクイズ（漢字、文法）、中間テスト（漢字、文法、読解、聴解、話し方）、期末試験（漢字、文法、読解、聴解、話し方、作文）、作文、敬語インタビュー等の課題、宿題の提出を評価の対象とした。各項目での評価のウエイトはJLPの方針の通りである。

(4) 課題

時間数の減少に伴い、全体的に各課の文型の定着が不十分なままに進んでしまったことと、技能別クラスのコマ数の確保が難しくなったことが反省である。また学生17名の個別指導が時間割内の1コマではカバーできなかったため、時間外に2コマ設けた。が、時間外、特に授業日以外の個別指導は学生にも負担で公平感を欠くため、途中からは金曜日の3限（時間内）と昼休みを利用して実施することにした。毎週一人一人と個別に話せる時間が持てたのはよかったが、一人あたりの時間が10分弱と短すぎて中途半端という感は拭えなかった。個別指導の公平かつ効率的な実施は、新時間割における大きな課題の一つである。

中級コース

中級のコースは「日本語 J4」「日本語 J5」「日本語 J6」「集中日本語 C」の4コースである。先に述べたように、「集中日本語 B」は初級の「J3」と中級の「J4」をカバーするコースである。

1. 時間割と単位

J4、J5、J6 コースの時間割を表6に、集中日本語コースの時間割を表7に示す。J4、J5、J6のコースのコマ数と単位数は、初級のJ1、J2、J3と同様、週8コマ5単位だが、時間割は異なっている。集中日本語コースはA、B、Cともに週15コマ10単位、時間割も統一されている。8コマ、15コマのうち、1コマが個別指導にあてられる。

表6 中級のJコースの時間割

網掛けのコマが授業時間

	月	火	水	木	金
1限					
2限					
3限					

表7 集中日本語Cコースの時間割

網掛けのコマが授業時間

	月	火	水	木	金
1限					
2限					
3限					
4限					
5限					

2. コースの目的とシラバス

コースオファリングに掲載したそれぞれのコースの目標を表8から表10に示す。集中日本語Bのコース目標はJ4と、集中日本語Cのコース目標はJ6と同等に設定してある。

表 8 日本語 J4 コースの概要と目標

コース概要：初級を終えた学生が、中級初めの文法・表現を身に付けて、社会や文化の身近なトピックについて聞いたり、読んだり、話したり、書いたりできるようになる。

コース目標：

- ・自分の力で日本語を学習する方法を学ぶ。
- ・漢字約 650 字とその漢字を使ったことばが読めるようになる。
- ・漢字約 450 字が書けるようになる。
- ・書きことばで使われる単語、文法・表現が使えるようになる。
- ・簡単な説明やアナウンスなどが理解できるようになる。
- ・内容と構造を理解しながら、身近なトピックについての文章が読めるようになる。
- ・聞いたり読んだりしたものについて、意見や感想を言ったり書いたりできるようになる。
- ・ある程度まとまりのある内容の会話や、簡単な話し合い、発表ができるようになる。
- ・スタイルの違いを意識しながら 600 字から 800 字の文章が書けるようになる。

表 9 日本語 J5 コースの概要と目標

コース概要：日本語の書きことば、話しことばの中級半ばのコースである。社会や文化に関するトピックを通して学ぶ。

コース目標：

- ・自分の力で日本語を学習する方法が身につく。
- ・漢字約 900 字とその漢字を使ったことばが読めるようになる。
- ・漢字約 650 字が書けるようになる。
- ・書きことばや、やや抽象的内容に使われる単語、文法・表現が使えるようになる。
- ・具体的でまとまりのある内容について、わかりやすく話されるテレビやラジオなどの話の要点がほぼ理解できるようになる。
- ・文章の背景を理解した上で、段落構成を把握しながら読めるようになる。
- ・聞いたり読んだりしたものについてまとめたり、意見や感想を言ったり、書いたりできるようになる。
- ・適切な方法で、会話、話し合い、スピーチ、発表ができるようになる。
- ・読み手を意識して、適切な表現と構成で、メール、作文、レポートなどが書けるようになる。

表 10 日本語 J6 コースの概要と目標

<p>コース概要：上級の前の段階として、中級後半の文法・表現を身につけ、抽象的、やや専門的な内容について聞いたり、読んだり、話したり、書いたりできるようになる。</p> <p>コース目標：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自律的に学ぶ態度が身につく。 ・ 漢字約 1150 字とその漢字を使ったことばが読めるようになる。 ・ 漢字約 850 字が書けるようになる。 ・ 書きことばや抽象的な内容に使われる単語、文法・表現が自然に使えるようになる。 ・ テレビ・ラジオの報道や解説などの要点が理解できるようになる。 ・ 抽象的、やや専門的な文章について、背景を理解し、段落構成を把握しながら読めるようになる。 ・ 聞いたり読んだりしたものについて時間内にまとめたり、意見や感想を言ったり書いたりできるようになる。 ・ 相手や場面に合った適切な方法で、スピーチ、討論、発表などができるようになる。 ・ 読み手を意識して、適切な表現と構成で、意見文、説明文、レポートなどが書けるようになる。
--

3. 教科書など

中級では 2012 年度秋学期より、トピックシラバスで構成した自作の教材を使用した。紙媒体の教材としては「読解本文、漢字・文法・表現のための学習教材、書き方と話し方の技能を高めるための補助タスク」および練習帳で構成した。J4、J5、J6 の 3 コースごとに制作し、各コースに 8 課を準備した。具体的なトピックは以下の通りである。

コース	トピック
J4	学生生活、食と健康（インタビュー）、昔話（浦島太郎）、日本語（文字の歴史）、大学の歴史と使命、紀行（旅行と天気）、スポーツ（箱根駅伝）、環境を守る活動（ボランティア活動）
J5	日本語（和語と漢語）、公共交通機関のマナー、短編小説、公共施設、ロボットと雇用、趣味・娯楽、地球と人類、文学（エッセイ）
J6	職業（調査報告）、大学での出会い、多文化共生、動物と人間、若者と政治、歴史と平和、宇宙開発、日本文学（詩歌）

コースのデザインとしてはコースごとに「読み書き聞き話す」という 4 技能を統合するプロジェクトワークをアカデミックパーパスを念頭に組み込んだ。コースによってはオンライン教材として“Quizlet”というオンラインのアプリによる漢字・単語学習と、本文の読み上げ音声を準備した。

4. 授業の流れと内容

中級では、週7コマの授業と1コマの個別指導の計8コマで授業を構成する。7コマで1課をカバーし、漢字と漢字語彙、文法、表現などの言語要素の学習に3コマ、読解、作文、聴解、話し方などの技能の学習に4コマ、個別指導1コマが基本のパターンとなっている。ただし、学期、コースによって若干の調整がある。

以下に「集中日本語 B」「日本語 J4」「日本語 J5」「日本語 J6」「集中日本語 C」の順に概要を記す。初級と中級にまたがる「集中日本語 B」の報告は他より丁寧な報告になっている。

集中日本語 B 報告

数野 恵理

(1) 集中日本語 2 から集中日本語 B へ

従来の集中日本語 2 は 20 コマで日本語 3 (以下 J3) と日本語 4 (以下 J4) をカバーする 12 単位のコースだったが、新カリキュラムの集中日本語 B (以下 I-B) は授業 14 コマ、個別指導 1 コマ、10 単位のコースとなった。1 週間のスケジュールは集中日本語 A と同様である。個別指導はどの時間帯に入れてもよいことになっているが、金曜日が 5 コマあるため、金曜日の 5 限目を個別指導とした。

以下では 2013 年度秋学期・冬学期の I-B について、J3 相当の前半と J4 をカバーする後半に分けて報告する。

(2) 学期の前半 J3 レベル

1) J3 レベルの授業の流れと内容

学期の前半は『ICU の日本語 3』を教科書として以下の流れで基本を押さえ、これに総合的な活動を加えることにより応用力を養っていった。1 週間に 2 ~ 2.5 課進め、約 5 週間で 21 課から 30 課までの 10 課を終えた。

前日	新しいことば (5 分程度)
1-3 コマ目	フォーメーション・ドリル・ロールプレイ
4 コマ目	漢字とリーディング (教科書の読み物)

カリキュラム改革前はフォーメーションとドリルだけで平均計 3 コマ、ロールプレイに 1 コマ、計 4 コマ使っていたが、新カリキュラムでは授業時間が減ったためフォーメーション・ドリル・ロールプレイを組み合わせた計 3 コマを基本とした。

また、従来は各課の漢字に 1 コマを使っていたが、I-B では漢字とリーディングを合わせて 1 コマとした。リーディングは従来より 1 コマの前半部分で教科書の読み物を読み、

後半は教科書以外の読み物を読むなどしていたので、教科書の読み物にかかる時間はカリキュラム改革前後で変わっていないが、漢字の授業時間はかなり短縮し、自習の部分が増えた。

なお、従来 J3 修了時までには教科書で学ぶ漢字は書き漢字として 245 字、読み漢字として 155 字となっていたが、中級までにより多くの漢字を学習しておくことが重要であるという認識が JLP で共有され、J3 レベルで学習する漢字を増やすことになった。これまで読み漢字として扱っていたものを書き漢字とするなどして、書き漢字を各課 5 字、10 課で計 55 字選んで追加した。2013 年度の夏期日本語教育以降はこの追加漢字を加え、J3 修了時までには学習する書き漢字を 300 字とした。また、教科書のリーディングのうち 30 課の読み物はポケベルで話題が古いため、以前から別の読み物で対応していたが、今回「留学生の作文 顔文字」という別の読み物を新たに書き下ろして読ませることになった。

以上の教科書に沿ったフォーメーション・ドリル・ロールプレイ、漢字・リーディングに加え、総合的な活動として毎週「読む」「聞く」「書く」「話す」といった授業を組み込んだ。「読む」「聞く」「書く」「話す」を単独で 1 コマ実施することもあれば、2 つの技能を組み合わせで 1 コマ実施することもあった。読解は J4 に入るとかなり難易度が上がるので、既習文型を用いて新たに書き下ろした読み物などを使い、中級への橋渡しとした。「書く」活動では「観光地の紹介」「英語学習のアドバイス」「推薦状の依頼の手紙」など、既習文型を使って書けるトピックを設定し、毎週一つ作文を書いた。「話す」活動では主に作文と同じトピックあるいは別のトピックでスピーチをした。

2) J3 レベルの学習支援の方法

個別指導

新カリキュラムではオフィスアワーとは別に個別指導の時間がコースの時間割に組み込まれた。I-B でも毎週金曜日の 5 限と時間割外の 0.5 ～ 1 コマを個別指導とした。毎週一人 10 分程度の時間を使い、作文やスピーチ、クイズなどのフィードバックをしたり、発音・会話の練習をしたりした。

宿題

学期の前半は「新しいことば (予習)」「文法 (復習)」「漢字 (復習)」を各課の宿題として提出させ、その他に作文やスピーチの準備を課した。教科書のリーディングは L27 まではその場ですぐに読める簡単なものであったため、宿題としなかったが、L28 以降は宿題として読んでこさせたあとで授業を行う形にして、学期の後半 J4 レベルでも予習形式をとった。また、以前は各課を始める前に新しいことばのクイズを行っていたが、ことばのクイズを課の始めに実施するのはやめることになった。しかし、クイズがないとことばを覚えてこないで新しい文法の練習がスムーズに進まないという声もあり、クイズの代わりに予習形式の簡単なことばの宿題を課し新出語を学習してくるようにさせた。文法と漢字は復習形式の宿題とし、JLP 作成教材「J3 文法練習帳」と「J3 漢字練習帳」を提出させた。

クイズ

以前は課ごとに「ことばのクイズ」「文法のクイズ」「漢字のクイズ」を実施していたので、毎日一つ、時には一日に複数のクイズがあったが、学生からクイズが多すぎるという意見もあり、新カリキュラムでは週に一度2課分のまとめクイズを行うことになった。Int. Bは木曜日に授業がないので、その日に復習できるよう、毎週金曜日の1限の前半をクイズの時間とし、J3のレベルでは「漢字クイズ」と「文法とことばのクイズ」を実施した。

オンラインツール

J3の新しいことばと漢字を“Quizlet”で練習できるようにして、課ごとに“Moodle”にリンクを載せた。“Moodle”はICUでも多くのコースが利用しているオンラインの教育管理ソフトで、“Quizlet”というのはフラッシュカードやゲームで学習できる無料のオンラインツールである。“Quizlet”はパソコンやスマートフォンで自由に使えるので、自習として大部分の学生が利用していた。また、教科書のフォーメーション・ドリル・ロールプレイ・リーディングの音声はオンラインで公開されているので、これも積極的に利用するように奨励した。

(3) 学期の後半 J4 レベル

1) J4 レベルの授業の流れと内容

次に学期の後半すなわち J4 レベルの授業の流れと内容について説明する。JLP で新しく作成した教材を教科書として以下の流れで授業を行い、それ以外の時間に総合的な活動を入れた。

1 コマ目	漢字語彙 (教科書の「漢字」)
2 コマ目	文型 (教科書の「文型・表現」の文型にあたる部分)
3 コマ目	精読 (教科書の「読解本文 1」)
4 コマ目	表現 (教科書の「文型・表現」の表現にあたる部分)
5 コマ目	速読 (教科書の「読解本文 2」)
6 コマ目	話す・書く (教科書の「発展」)

読解は教科書の本文 1 を精読として、本文 2 は制限時間内にその場で読むものとして使った。総合活動の時間は各課のテーマについて話したり書いたりするほか、メールの書き方やオンラインツールの使い方を学んだり、日常会話をしたり、町で見つけた漢字の発表をしたりした。また、学期の前半と後半に 1 回ずつ日本人学生と話をするビジターセッションの機会を設けた。

2) J4 レベルの学習支援の方法

個別指導

学期の後半は、前半の内容の他に、授業で読んだ読み物の内容を学生に自分のことばで説明させるといった活動も加えた。読解の授業中にもこのような活動はしていたが、全

員に言わせる時間はないので、個別指導の時間は有効であった。

宿題

J4 レベルでは「漢字の読み（予習）」「漢字の書きと文型（復習）」「読解（予習）」の宿題を課した。漢字は練習帳の読み練習の部分の宿題とし、新出漢字の読みを予習して来させ、授業ではその答え合わせから始め、書く練習や漢字語彙の使い方に焦点を当てた。そして漢字と文型をクラスで学んだあとで、新しい漢字と文型を使って文を作るという復習形式の宿題を出した。読解は教科書の本文1を読んで質問に答えるという宿題を出した。その他、総合活動の時間に多読の紹介をして好きな読み物を選ばせておき、授業時間外に図書館でその本を借りて続きを読み、あらすじと感想を書いて来させるという課題も出した。

クイズ

金曜日あるいは月曜日の1限の前半をクイズの時間とし、「漢字クイズ」と「文型表現のクイズ」を実施した。

オンラインツール

J3 同様、J4 の漢字も“Quizlet”で練習できるようにして、課ごとに“Moodle”にリンクを載せた。

(4) 成績評価

I-B の成績評価の方法はJLP の規定に準じ、期末試験 45%、中間テスト 25%、クイズ 10%、タスク・宿題 20% である。

2013 年度秋・冬学期の I-B ではタスク・宿題の内訳を作文・スピーチなどのタスク 15%、宿題 5% とした。期末試験・中間テストはともに「漢字」、「文法（文型表現）」、「読む」、「聞く」、「話す」、「作文」の試験・テストを実施した。

(5) 今後の課題

学期末の学生によるコース評価では秋学期も冬学期もコース全体としては高く評価されていたものの、冬学期は勉強の量、宿題の量が多すぎるといったコメントが目立った。冬学期は特に学期後半になってから、明け方まで勉強していたという声も聞かれ、心身ともに疲れ、ストレスを感じている学生が多いように見受けられた。

従来から集中日本語のコースは短期間に2つのレベルをカバーするためかなり大変なコースではあったが、新カリキュラムでは以前と同じ到達目標のまま授業時間が減り、学生は以前に増して自律学習が求められるようになった。新カリキュラムで日本語の授業時間が減った分、日本語以外のコースも同時に履修できるようになったという利点はあるが、他のコースの課題と日本語のコースの課題を同時にこなしていかなければならないため、学生にとって負担が大きくなった。

プレースメントテストを受けてコースが決まる秋学期は、母国で一通り初級の学習を

終えているというような場合もあり、全体的に余裕のある学生が多いので、宿題が多くて大変だというようなコメントがあまり出てこなかったのだと思われる。一方、冬学期の学生にはもともとそのような余裕はない。筆者は春学期のコースを担当していないが、春学期は冬学期同様、あるいはそれ以上にかなりの時間を自律学習に割かなければクラスについてこれないという状況になったのではないかと推測される。集中日本語を取ろうと思う学生はまじめな学生が多いので、必死に努力するが、Int. B で要求した課題は非漢字圏の学生にとってかなりの負担となっていた。語学において自律学習が重要なのは確かだが、あまりに多くを求めるのは望ましくないので、無理のない範囲で学習できる内容、到達できる目標であるか、検討していく必要があるだろう。

一つの解決策として、学生から J3 に比べて J4 の内容が難しかったので、半分ずつ時間を使うのではなく、J3 を短期間でカバーして、J4 に時間をかけてほしいという意見があった。これには一理あるので、一学期間で2つのレベルの内容を学習するという Int. B の特徴を生かして、J3 にかかる時間をもう少し短めに、J4 にかかる時間を長めに設定してみてもよいかもしれない。

最後になるが、授業時間が減った中で、総合活動の時間をどのように確保するかということも課題となった。運用練習が大切であることは十分に認識しており、なるべく話す・書く・聞く・読むという活動をバランスよく入れるようにしたが、思うように総合活動の時間を設けることができなかった。限られた時間の中で何に時間を使うのが効果的なのか今後も模索していく必要があるだろう。

日本語 J4 報告

鈴木 庸子

(1) 授業の流れと内容

日本語 J4 は、次のような流れで授業数7コマを構成した。

- | |
|----------------------|
| 1 コマ目：漢字・漢字語彙 |
| 2 コマ目：文法 |
| 3 コマ目：表現 |
| 4-5 コマ目：読解 |
| 6 コマ目：作文・聴解 |
| 7 コマ目：話し方（スピーチと話し合い） |

技能の指導では、読解文に対する感想・意見や、自分の体験などについて、「書く（作文）→話す（スピーチまたは話し合い）」という順番で行った。話した後で書く、という

流れも可能だが中級初めのレベルでは、一度内容を書き出し、整理し、必要語彙も調べて覚えたうえで、その内容を話すほうが中身の濃い成果が期待できると判断してこの流れを採用した。

中間テストの週には週8コマ中3コマ弱をスピーキングテストを含むテスト時間に充て、残りの5コマをプロジェクトワークに充てた。プロジェクトワークは、キャンパス内あるいは街の中の標識や店に見られる看板から興味を持った漢字・漢字語彙を書写（または写真撮影）して持ち帰り、その漢字語彙の意味、読み方、なぜ興味深いと思ったかを説明するという、調べ学習の要素を取り入れつつ日本語学習の動機を高めるタスクである。成果は口頭発表とレポートにまとめた。

(2) 学習支援の方法

上記7コマに加えて、1コマの個別指導の時間を設け、各学生10分程度、宿題、クイズ、作文、スピーチ等のフィードバックに充てた。宿題は漢字練習、文法練習、読解問題を授業後に課した。

(3) 学習評価

評価はJLPの方針に沿い、クイズ、中間テスト、期末試験、宿題、タスクで評価した。クイズは漢字クイズと文法クイズを別々に行った学期とスケジュールの都合などで週1回漢字と文法を合わせたクイズを行った学期がある。中間テスト、期末試験の試験内容は漢字テスト、文法・表現テスト、読解テスト、話し方テスト（対面のインタビュー形式）で行った。

(4) 課題

同じJ4のコースであっても、学期開始時の学生の特徴が学期によって大きく異なる。どのコースも多かれ少なかれ学生は日本語習得の度合いや技能のバラつきに差があるものだが、中級初めのコースの秋学期が特にその差が大きいと思われる。特に、初級文法と中級文法の狭間にある、形式名詞や使役受け身形、敬語、複文構成力、名詞節の扱い方などは個々の学生によってさまざまである。漢字力も同様である。いわゆる日本語力の高低ではなく、技能のバラつきによる学習者特性の多様性に、どう対応し学生の力を伸ばすことができるか、評価の方法も含めて課題である。

日本語 J5 報告

尾崎久美子

(1) 授業の流れと内容

日本語 J5 は、次のような流れで授業数 7 コマを構成した。

- | |
|---|
| 1 コマ目：聴解、漢字・漢字語彙 |
| 2-3 コマ目：文型・表現 |
| 4-5 コマ目：読解 |
| 6 コマ目：発表、話し方 |
| 7 コマ目：プロジェクト、書き方
(担当者の関係で、学期によって 6・7 コマ目を 1 コマ目と
2 コマ目の間に行うこともある) |

技能の指導のうち、話し方ではスピーチを 3 回、日常会話を 2 回、ディベートを 2 回（準備コマを含む）行った。書き方の作文では、1 週目に初稿、翌週に清書をクラス内で行い、3 回執筆した。聴解は漢字と組み合わせて市販の聴解教材を使用した。プロジェクトでは、中間テストの直後に課外見学を行い、その成果を発表した。

(2) 学習支援の方法

他のコースと同様、上記 7 コマに加えて、1 コマの個別指導の時間を設け、授業の復習や質問への対応のほか、初級文法の補強などを行った。宿題は J4 同様、漢字練習、文法練習、読解問題を授業後に課した。

(3) 学習評価

評価は JLP の方針の通り、クイズ、中間テスト、期末試験、宿題、タスクで評価した。クイズは復習型の漢字クイズと文法クイズ、予習型の語彙クイズと読解クイズを行った。中間テスト、期末試験の試験内容は漢字テスト、文法・表現テスト、読解テスト、話し方テスト（対面のインタビュー形式）を行い、期末直前に作文の期末試験を授業内で行った。

(4) 課題

教科書の文型・表現は、基本的に課の読解教材をもとに作成されたため、課によって項目数や内容にばらつきがある。これを是正し、J5 レベルの中級日本語で学ぶべき文型や表現および語彙を補うためには、適宜、時事問題などの補足教材を活用しつつ、改訂を進めて行く必要があるだろう。また、読解教材のトピックは、一般社会の出来事でありながら個人的な経験や身近な出来事から話題を展開していけるようなものを選んだが、トピックは、今後 JLP の全コースの流れの中で捉え直し、総合的な計画のもとで改訂作業を進めることが肝要である。

日本語 J6 報告

小澤 伊久美

(1) 授業の流れと内容

日本語 J6 は、次のような流れで授業数 7 コマを構成した。

- 1-2 コマ目：(前の課を範囲とする) クイズ、文法
- 3 コマ目：言葉の使い方
- 4-5 コマ目：読解とディスカッション
- 6-7 コマ目：総合的活動 (スピーチやディスカッション、作文など)

中級の最終段階であることから、教師がいない時にも学習者が自分で学び続けられることができるようになることを目標の一つとしていたため、漢字・漢字語彙については教科書と宿題のワークシートを活用して授業外で学ぶことを基本とした。また、コース開始時に、授業外で学ぶ際に使えるツールの紹介も積極的に行った。

読解の時間のディスカッションは、読解文の内容そのものに直結する意見や感想について話し合う形を取った。それに対して総合的活動の時間では、読解文も一つの素材とし、当該課で扱うトピックに関してタスクを設定し、4 技能を総合的に運用し、学生が自らの考えを表現する活動を組み込んだ。そのうち、作文を書くことで自分の考えを表現するという活動では、サンプルとなるような文章を読ませ、そこで使えそうな表現についても意識させる形を取った。作文は授業内で書き、教師のフィードバックを受けた後で書き直して再提出する形を取ったため、二週間に 1 つの作文課題に取り組むというペースとした。なお、速読やリスニング、対話型の会話の練習などは、主として総合的活動の時間の一部を使って取り上げている。ただし、毎週定期的にも両方を扱うという形は取らなかった。

中間テストの週には週 7 コマ中 3 コマをスピーキングテストを含むテスト時間に充て、残りの 4 コマのうち 2 コマを各課のトピックとは異なる話題でまとめられた漢字・漢字語彙の学習に、2 コマをプロジェクトワークに充てた。

プロジェクトワークは、日本人学生 10 名程度に質問紙に基づいたインタビューを実施し、聞き取ったことの一部と感想をまとめるというものである。成果は口頭発表とワープロによるレポートとした。質問紙の作成は学期の初めから徐々に段階を踏んで準備した。第一課の読解文でアンケート調査結果を扱ったことを踏まえ、各自が取り上げたいトピックについて仮説を立てた上で質問項目を考えた。そして、聞き取り調査開始時の話し方、レポートのモデル、口頭発表の留意点などは授業で提示し、ワープロ文書の書式設定も練習した。中間テストの週の 1 コマは、ビジターセッションを実施して、インタビュー調査に必要なデータの数名分はビジターから聞き取る形を取った。

(2) 学習支援の方法

上記 7 コマに加えて、1 コマの個別指導の時間を設け、各学生 10 分程度、宿題、クイ

ズ、作文、スピーチ等のフィードバック、各自が授業外に取り組みたい個人学習の支援（日常会話、発音練習、自由トピックのスピーチや会話、授業外で読んだ物について内容や感想を話す等）に充てた。宿題は、漢字練習は自習、読解問題は予習、文法練習は授業後の練習として課した。

(3) 学習評価

評価は JLP の方針に従い、クイズ、中間テスト、期末試験、宿題、タスクで評価した。クイズは週 1 回漢字と文法を合わせた形式で行った。漢字や語彙のディクテーション形式の間も含まれている。中間テスト、期末試験の試験内容は漢字テスト、文法・表現テスト、読解テスト、話し方テスト（対面のインタビュー形式）、作文テストで行った。

(4) 課題

秋学期にプレースされた学生は、既習歴などから想像されるよりも低いレベルにプレースされたものが少なくないが、自分達自身では適当だと感じていた。知識はあるが運用力（読解力と表現力）をあげたいと感じていたようだ。漢字や語彙力が高めだったので漢字自習前提で授業が進められても、また、このペースで進められても問題がなかった。

しかし、冬学期・春学期にあがってくる学生達は、特に漢字の力や語彙の力が秋の学生に比べて低く、自習中心でこれだけの量をこなすのは厳しいようだった。漢字力・語彙力の高低が一学期間の学習効果にも学習の動機にも影響を与える様子が見て取れたため、効果的な語彙学習のあり方を考え、授業内でも授業外でも積極的に活用していく必要性が強く感じられた。

トピックについては、全体としては学生達の関心を引き、相互に意見を聞きながら考える活動が楽しかったという声が多かった。一方で、中級教材の 3 冊目を扱う日本語 J6 のレベルでは、読解文から漢字や文型の学習項目が抽出しにくいという困難があった。これは日本語 J4 や日本語 J5 で扱わない漢字・文型を日本語 J6 の教科書で扱うという制約から来るのだが、3 段階学ぶ上で無駄な重複を避けるというメリットはあるものの、学習者にとっては学習項目相互の関連性が薄いので学習負担が大きくなるという問題を生じさせている。この点も今後早急に検討すべき課題である。

集中日本語 C 報告

金山 泰子

(1) 授業の流れと内容

集中日本語 C のコースでは週 15 コマ（うち 1 コマは個別指導）のコースで J5 と J6 をカバーし、テキストは 1 週間に 2 課ずつ進む。基本的な授業の流れは以下の通りである。

1-2 コマ目 文型
3-4 コマ目 読解
5 コマ目 表現
6-7 コマ目 技能別（聞く、話す、書く、プロジェクト）
（担当者の関係で、「表現」のコマを読解の前に設けることもある）

新しい課に入る前日のコマ（主に技能別）に、「導入」として、新しい課の進出漢字・語彙の導入を行った。「聞く」では、市販教材や生教材（ニュースなど）を使用、「話す」では、発表、ディスカッション、ディベートを実施した。プロジェクトについては、J6 と同様、インタビュープロジェクトを行った。

(2) 学習支援の方法

漢字・単語については“Quizlet”をオンラインで利用した。個別指導は、学生一人に対して週 1 回 10 分程度を充てることができ、文法の宿題、作文、クイズ、テスト、話し方のフィードバックを行った。宿題は、授業前に読解問題、漢字練習、授業後に文法練習を課した。

(3) 学習評価

評価は JLP の方針に沿い、クイズ、中間テスト、期末試験、宿題、タスクで評価した。クイズは漢字クイズと文法クイズを行った。タスクは、作文、スピーチ、プロジェクト発表を含む。中間テストの内容は、漢字、文法・表現、読解、聞く・話す、期末試験の内容は漢字、文法・表現、読解、聞く、話す、作文である。

(4) 課題

中級レベルでは 2012 年度より新教材を使用しているが、中級で扱うべき文法項目・語彙、読解テーマ・教材の適切性などについてさらなる検討が必要である。特に中級最後のレベルである J6 においては、次レベルである上級の J7 との連携を視野に入れつつ、中級までで扱う文型を確認する必要があると思われる。また、文型・表現については、補助教材としてクラスで練習するためのプリントを作成したが、このプリントも含め、補助教材の整備も課題の一つである。

上級コース

中級に続く上級のコースは「日本語 J7」「日本語 J8」「日本語 J9」の 3 コースである。

1. 時間割と単位

J7、J8、J9 コースの時間割を表 11 に示す。J7,J8,J9 のコースのコマ数と単位数は、それぞれ週 6 コマ 5 単位、週 4 コマ 4 単位、週 3 コマ 3 単位である。J7 コースまでが 4 年本科生の必修コースである。

表 11 日本語 J7 コースの時間割

網掛けのコマが授業時間

	月	火	水	木	金
1 限					
2 限					

表 12 日本語 J8 コースの時間割

網掛けのコマが授業時間

	月	火	水	木	金
1 限					
2 限					
3 限					

表 13 日本語 J9 コースの時間割

網掛けのコマが授業時間

	月	火	水	木	金
1 限					
2 限					
3 限					

2. コースの目的

表 14 日本語 J7 コースの概要と目標

コース概要：日英両語が使用される J/E、E/J の授業に参加して課題が達成できるように、幅広い表現力を身に付ける。

コース目標：

1. 構成や論旨が明確であれば、長い会話や講義、討論、メディア系音声言語を理解することができるようになる。
2. 辞書を用いれば、なじみのある分野の抽象的な長い文章を理解することができるようになる。
3. 誤解につながるような間違いを犯したり相手に緊張・不快感を与えたりすることなく、話し合いや発表をすることができるようになる。
4. 作文やレポートで一貫性・結束性のある明瞭な文章を書くことができるようになる。

表 15 日本語 J8 コースの概要と目標

コース概要：

1. 日本語で行われる大学の授業に参加して課題が達成できるように、即応能力を身に付ける。
2. 抽象的な内容について社会的・文化的知識を活用して表現したり理解したりすることができるようになる。

コース目標：

1. 一度聞いただけで講義や視聴したものの要点が理解できるようになる。
2. 読み物にその場で目を通し、要点を理解したり、必要な情報を取ったりすることができるようになる。
3. 状況に応じて、その場ですぐに自分自身が言いたいことを明確に述べられるようになる。
4. 制限時間内に明瞭でまとまった文章が書けるようになる。

表 16 日本語 J9 コースの概要と目標

コース概要：上級のレベルに達している学習者が、多様なジャンルの読解資料を読み、議論・プレゼンテーションを通して日本語母語話者に準ずる読解力および話す力、文章作成能力とプレゼンテーションの技術を身につけることを目指す。

コース目標：

1. 新聞・雑誌の記事、小説・新書などの文章の内容を正確に理解できるようにする。

2. 読んだものについて、論理的かつ建設的な討論ができるようになる。
3. 漢字・語彙・表現の知識の拡張を図る。
4. 日本語による論文の書き方、口頭発表の仕方を身につける。

3. 教科書など

J7 のコースでは教科書として使用するものは文法の練習や確認用として『改定版 どんなどきどう使う日本語表現文型 500』のみで、そのほかの使用教材は、新聞、雑誌、新書、小説などから適宜抜粋したものをコピー教材として用いる。聴解のために NHK や TBS の公式ウェブサイトに置かれた番組、たとえば NHK for school の番組やニュース動画などをよく利用する。そのほかの作文指導や口頭発表指導、語彙・文法指導には、自作教材を作成して使用している。

J8 および J9 では文法を授業内容に組み込むことはなく、したがって上記の文法教科書も使用しない。そのほかの教材は基本的に J7 と同じ姿勢で、J8、J9 とレベルが上がるにつれ、より専門性が高いもの、より長さのあるものを使用する。

4. 授業の流れ

上級コースは、初級、中級コースと異なり、上級コースとして定式化された授業の流れは策定していない。各コースの授業内容に沿って、コースごと、学期ごとに担当教員がスケジュールとして授業の流れをデザインしている点が上級コースの特徴とも言える。

以下、JLP として大きくカリキュラム変更のあった J7 について、前年度までの上級日本語 1 のコースとの比較を交えてやや丁寧な報告を、J8 についてコース概要を掲載し、2013 年度に開講されなかった J9 についてはこの報告書においては割愛する。

日本語 J7 報告

数野 恵理

(1) 上級 1 「読解」「話し方」「聴解」「書き方」から日本語 J7 へ

2013 年度の JLP カリキュラム改革に先駆け、上級レベルの日本語は 2009 年度から段階的に移行してきた。もともと上級日本語 1 は「読解」「話し方」「聴解」「書き方」という 4 技能が独立したコースであったが、教育効果を高めるため 2009 年度秋学期より「読解」「話し方」の 2 コース、「聴解」「書き方」の 2 コースは同じ学期に履修するよう学生に強く勧め、それぞれのコースで同じテーマを扱い連携させるようになった。その後、2012 年度秋学期にはそれまで上級日本語 1「読解」「話し方」が開講されていた時間帯に「日

本語 7 (以下 J7)」、上級日本語 1「聴解」「書き方」が開講されていた時間帯に「日本語 8 (以下 J8)」という 4 技能を総合的に伸ばす新コースが開講された。2012 年度に 5 単位 5 コマとして始まった日本語 7 は、2013 年度より 5 単位 6 コマに変わり、6 コマのうち 1 コマは個別指導に充てられることになった。時間割の変遷は以下の通りである。

2011 年度まで

	月	火	水	木	金
1		A1R	A1A		A1A
2		A1R	A1W	A1R	A1W
3		A1S		A1S	

読解 (A1R) …3 単位 3 コマ
 話し方 (A1S) …2 単位 2 コマ
 聴解 (A1A) …2 単位 2 コマ
 書き方 (A1W) …2 単位 2 コマ

2012 年度 J7…5 単位 5 コマ

	月	火	水	木	金
1		J7	J8		J8
2		J7	J8	J7	J8
3		J7		J7	

2013 年度以降 J7…5 単位 6 コマ

	月	火	水	木	金
1	J7		J7		J7
2	J7		J7		J7

田中 (2014) による JLP 改革の報告には新カリキュラムの三本柱について書かれているが、そのうちの二つは J7 に大きく関係するものである。その一つは「外国語としての日本語プログラム」と「第一言語／継承語としての日本語プログラム」を明確に分けることである。この二つはもともとはっきりと分けられていたが、読み書き能力が低い従来からの帰国生向けの日本語特別教育についていくことができないと判断され、外国人学生向けの一般日本語プログラムのコースに入る継承語系の学生が近年増加傾向にあった。特に筆者が 2011 年度秋学期に担当した上級日本語 1 読解・話し方のコースはこれが顕著で、受講者の約半数が継承語系の学生となり、ニーズの異なる学生が同じコースに混在していた。しかし、カリキュラム改革によりこの問題は解消され、2013 年度の J7 は継承語系の学生が秋、冬学期ともに 1 名のみとなった。この学生はどちらも 4 年本科生ではなく、それぞれ夏期日本語教育で J6、秋学期に集中日本語 C を履修してから J7 に入った交換留学生であった。

J7 のデザインに大きな影響を与えた改革のもう一つの柱は、卒業のための語学履修要件の変更である。近年、ICU で日本語をゼロから学ぶ 4 年本科生にとって上級日本語 1 まで終えることは大きな負担となっていた。その負担を減らすべく、2013 年度以降に入学する 9 月生は J8 ではなく J7 までが卒業のための語学履修要件となった (田中 2014)。これに伴い、J7 修了時までには大学で必要となる日本語力を身につけさせなければならなくなったわけだが、従来の上級 1 の前半部分にあたる J7 を修了しただけでは日本語で開講される授業に参加するのは難しい場合もある。幸い ICU には講義は日本語だが教科書は英語というような日英両語が使用される授業がある。そこで、まずはこのような授業に参加して課題が達成できるようになるということを J7 の最終目標として掲げることになった。

以下では筆者が担当した 2013 年度秋・冬学期のコースについて報告する。

(2) 授業の流れと内容

新カリキュラムで 4 技能が統合された主な理由は、読んで聞いて話して書くという活動を統合的に行ったほうが語彙も定着して学習効果が高まるだろうということだったので、J7 でも中級コースのようにテーマに沿った学習を行うことになった。テーマは学期によって変わるが、冬学期は「東京五輪開催」、「先住民族」、「コミュニケーション」、「新しい大学入学試験」、「原子力発電」などを扱い、それぞれのテーマに 1、2 週間かけた。

授業は基本的に、まず読解をして、そのあとで読み物に出てきた表現文型とそれに関連する表現文型を学び、さらに読解と聴解で扱ったテーマについて話したり書いたりする形にした。2013 年度冬学期の授業は 1 日目に読解 1 コマ、表現文型 1 コマ、2 日目に聴解 1 コマ、話す 1 コマ、3 日目に書く 1 コマ、個別指導 1 コマという流れで行い、漢字語彙は自習とした。

コースは書籍、新聞、雑誌、オンラインで視聴できるテレビ番組の動画、ラジオなど生の教材を用いてデザインし、表現文型のみ『改訂版 どんなどきどう使う日本語表現文型 500』を教科書として用いた。話す活動では話し合い・ディベート・発表・敬語での会話、書く活動では作文・レポート・レジメを書くというような活動をした。

(3) 学習支援の方法

個別指導

個別指導はコースの時間割に組み込まれた 1 コマのほか、時間割外のもう 1 コマを使い、作文や宿題のフィードバックを行ったり、授業で扱ったテーマについて話したりした。個別指導の前の時間は書きのクラスだったが、例えば授業では「事実文・意見文・行動文」などの表現を指導したり練習したりするところまでで、実際に作文を書く時間はほとんど取ることができなかつたので、個別指導の順番を待っている間に作文を書かせ、その時間内に提出させるようにしていた。

宿題

主な宿題は予習形式の読解の宿題と復習形式の表現文型の宿題である。読解は授業中に答え合わせをし、自分で間違いを直すという練習をしたが、まだしっかりと直せないことも多いため授業後に回収して添削した。その他、インタビュープロジェクトとして、各自が選んだテーマについて日本人 1 名に 20 分程度のインタビューをし、レポートを書くという課題を出した。また、聴解、話すクラスなどの準備を宿題とすることもあった。

クイズ

2013 年冬学期は 1) 聴解クイズ、2) 漢字の読みと意味のクイズ、3) 漢字の書きクイズの 3 種類を実施した。聴解クイズは前回の聴解クラスの内容に関する問題を出題した。秋学期は漢字の読み・書き・意味のクイズを一度に行っていたが、漢字語彙の数が多く負担が大きいという意見があったので、冬学期はまず読みと意味のクイズをして、次回

のクラスで書きのクイズをするという形にした。

漢字は読解の読み物に出てくる新出漢字から 10～15 字程度を選び、一つの漢字につき漢字語彙 2、3 語を読み書きできるようにさせた。また、その他の新出漢字や既習漢字を含む新出の漢字語彙については、読みと意味だけをクイズ・試験の範囲とした。

オンラインツール

J7 を修了して語学履修要件を満たしたあとでも自律的に学習が続けられるよう、オンラインツールは積極的に活用させた。

「2. 授業の流れと内容」で説明したように、J7 では漢字語彙のために 1 コマ使うというようなことができなかつたため、漢字学習は自習としていた。まず、こちらで上述のクイズ・試験に出題する漢字語彙のリストをエクセルに入力して、J7 の“Moodle”に載せた。このリストには読み方や意味は載せなかつたが、必要に応じて漢字語彙をオンラインツール“Reading Tutor”にコピーペーストして読み方や意味を調べ、自分の語彙リストを作成したり、別のウェブサイトのコピーペーストして漢字の書き順を調べたりできるよう、学期の最初にその使い方を指導しておいた。また、オンラインツール“Quizlet”で漢字の読み書きが学習できるよう、各課のリンクを“Moodle”に載せておいた。

この他、授業で使用した教材のうち、オンラインで閲覧、視聴できる読解、聴解教材は“Moodle”にリンクを載せた。

(4) 成績評価

J7 の成績は JLP の基準をコースに合わせて調整し期末試験 40%、中間テスト 20%、平常点 (レポート、クイズ、タスク・宿題) 40% とした。

2013 年度秋・冬学期は中間テストで漢字・表現文型・読解・作文を実施し、期末試験ではこの他に聴解とディベートの試験も行った。平常点の内訳はレポート 10%、クイズ 10%、発表・ディベート 10%、宿題・その他のタスク 10% とした。

(5) 今後の課題

カリキュラム改革により、継承語系の学生は読み書き能力が低い場合でも原則として日本語特別教育プログラムに入ることになったため、J7 では外国人学習者のニーズに合った授業ができるようになった。とはいえ、J7 のような上級のクラスには多様な学習歴を持つ学生が集まっており、レベルもニーズもかなり異なる。

ここで問題となったのは漢字の弱い学生である。漢字力のない学生は J7 の授業についてくるのが困難で、学生自身も負担を感じやすく、毎学期 2、3 名が J7 の内容は難しすぎると相談にくる。漢字が書けなくても読める場合は授業についてこれないということはないが、読めない場合はたいてい語彙も非常に限られているので、読解はもちろん聴解も難しくなる。J7 では一つのテーマについて複数の読み物を読み、そのテーマについて聞いたり話したり書いたりするようにして語彙の定着を図っており、語彙が増えたという声も多く聞かれたが、もともとの語彙が少ない学生の場合は難しい。JLP 全体で初・中級から語彙力をつけていくことが課題であろう。

また、漢字の書きについては、実生活で漢字を手書きで書くことが求められないので、これ以上漢字の書き方を覚える必要性が感じられないという声が複数の学生からあった。確かに最近ではタイプする機会が多く、手書きで漢字を書く機会は以前に比べかなり減ってきている。初・中級で学ぶ基本的な漢字は手書きでも書けたほうがいいだろうが、それ以外はタイプするときに正しい漢字を認識して選ぶ力があればよいということが多くなっているかもしれない。2009 年度以降の上級 1 読解コースでは漢字の書きもクイズ・テスト・試験で出題してきたが、上級レベルでは漢字の書きを出題しないことも選択肢の一つとし、JLP で議論していけるとよい。

参考文献

田中和美 (2014) 「JLP 改革—新カリキュラム 2013 年秋から実施—」『ICU 日本語教育研究』10, 43-55

日本語 J8 報告

桜木 ともみ

(1) 授業の流れと内容

日本語 J8 は週に 2 日、計 4 コマの授業コマがあり、トピック毎に各技能の向上を目指す授業を 3 コマ、レポートやビブリオバトルといった各自で進めるプロジェクト活動の時間を 1 コマとした。授業では、新聞やニュース等の生教材を用いて読解・聴解を行い、その内容確認やディスカッション、各自の意見をまとめていく活動を行った上で、翌日の 1 分スピーチと作文に取り組んだ。各自のプロジェクトでは、ビブリオバトル（お勧めの本の読解と紹介の準備）とレポート（社会問題に関するテーマ）を進めるための講義や話し合い、課題に対するフィードバック等を行った。コース前半でレポートのテーマについて日本人学生と議論するビジターセッションを設けた。

(2) 学習支援の方法

授業コマ 4 コマとは別に、各学生 15 分程度の個別指導の時間を設け、質問への対応やクイズ・作文・スピーチ等のフィードバックに充てた。宿題として、授業で扱う教材の読解や語彙の予習・復習、スピーチや作文のための準備、各自のプロジェクトのための課題等があった。

また、“Moodle” に週ごとの課題や教材のリンクや関連ファイルを載せ、復習と授業前後の自主学習を促した。

(3) 学習評価

評価は JLP の方針に沿い、期末試験、中間テスト、クイズと、レポート・発表・スピー

チ・課題等の宿題・タスクにより評価した。クイズは、授業で扱った内容・語彙・表現に関するディクテーション形式で実施した。中間テスト、期末試験の試験内容は、聴解・漢字・語彙・読解・作文であった。

(4) 課題

J8の受講生には大学院生や卒業論文に取り組んでいる学生もいるため、社会的な問題を扱うトピックや読み物によっては学生の興味や理解度にかなり個人差があり、課題の難易度を調整することが難しい。上級クラスではレベル差があるのは仕方がないことかもしれないが、レベルやトピックに関わらず、各自が新しい情報から新たな意見や視点を得られるよう、教材や活動を工夫する必要があるだろう。

また、レポートや発表等の運用練習における引用の仕方や意見を述べる時の表現については、多様性と正確さに欠ける学生が多かった。上級レベルの運用力をつけるためには、より段階的な指導と練習を加えることが必要であろう。

日本語特別教育

1. 時間割と単位

日本語特別教育 (Special Japanese: SJ) プログラムのコースは基本となるコース (SJ1、SJ2、SJ3) と、漢字コース (SJ 漢字 1、SJ 漢字 2、SJ 漢字 3)、基礎科目 (SJ コア) の3種類のコースがゆるい連携をとりながら構成される「第一言語／継承語としての日本語プログラム」である。

日本語特別教育の基本となるコースの時間割を表 17、表 18、表 19 に示す。表は秋学期のもので、冬、春学期には SJ コアコースが開講されない。

SJ コアは秋学期のみ開講される 1 コマ 1 単位、全員必修のコースである。それ以外のコースは基本的に秋学期の初めにプレースメントテストを行い、学生の受講コースを指定する。SJ1、2、3 および SJ 漢字 1、2、3 のコースは、1、2、3 の順にレベルが上がるコースである。そのため、秋学期は 1、2、3 の 3 コースが同時にスタートし、冬学期は 1 がなくなって 2、3 の 2 コースが、翌年度春学期はさらに 2 がなくなって、3 のコースのみが開講される。

SJ1、2、3 のコースの時間割と単位はそれぞれ週 6 コマ 4 単位、週 4 コマ 3 単位、週 3 コマ 3 単位と、レベルが上がるにしたがってコマ数と単位数が減少する。SJ コアコースおよび SJ 漢字コース 1、2、3 はそれぞれ週 1 コマ 1 単位である。

表 17 日本語特別教育 1 のコースの時間割

網掛けのコマが授業時間

	月	火	水	木	金
1 限		SJ コア			
2 限					
3 限					
4 限					
5 限		SJ 漢字			

表 18 日本語特別教育 2 のコースの時間割

網掛けのコマが授業時間

	月	火	水	木	金
1 限		SJ コア			
2 限					
3 限					
4 限					
5 限		SJ 漢字			

表 19 日本語特別教育 3 のコースの時間割

網掛けのコマが授業時間

	月	火	水	木	金
1 限		SJ コア			
2 限					
3 限					
4 限					
5 限		SJ 漢字			

*表には秋学期のコースとしてコアのコースを示してある。冬、春学期は開講されない。

また SJ 漢字コースは 1、2、3 の 3 レベルとも同じ時間帯に開講される。

* SJ コアコースは 2014 年度には火曜日 3 限に変更された。

2. コースの目的など

日本語特別教育コアコースのコース概要、内容、成績は表 20 に示す通りである。

表 20 日本語特別教育基礎科目の概要

コース概要：日本文化や習慣を理解し、日本語を第一言語 / 継承語として運用するために必要な基本的知識とスキルを学び身につける。

コース目標：

- ・日本語、日本文化、日本事情についての知識を身につける。
- ・情報を収集し、それを伝えるスキルを身につける。

内容：講義と学生による発表で授業を進める。

成績：期末試験 50% 発表 30% 平常点 20%

日本語特別教育のコース概要、内容、成績は 1、2、3 の 3 レベルを通して共通で、表 21 の通りである。

表 21 日本語特別教育コース 1-3 の概要

コース概要：大学生として必要な漢字語彙力、読解力、文章構成力、発表力を増し、日本語特別教育 3 の修了時に大学生活を支障なく行っていける日本語運用能力を身につける。

内容：文章の読み書き、口頭発表の練習などを中心に進める。

成績：期末試験 40% 中間テスト 20% 平常点 (タスク・宿題、クイズ) 40%

コースの目標は、1、2、3 の 3 コースでレベルに合わせて表 22 のように変えている。

表 22 日本語特別教育コースの目標

日本語特別教育 1

コース目標：

- ・まとまった文章をキーワード、段落の要点、全体の構成を考えながら読むことができるようになる。
- ・読んだこと、聞いたことの内容に対する自分の意見をまとめて他の人に伝えられるようになる。
- ・適切なスタイルを用いて、自分の意見や感想を文章にまとめることができるようになる。

日本語特別教育 2

コース目標：

- ・様々なジャンルの文章を読んで、筆者の意図や主張が理解できるようになる。
- ・読んだこと、聞いたことの内容に対する自分の意見を適切な表現を用い正確に伝えられるようになる。
- ・図表などを用いて口頭発表やブックレポートができるようになる。

日本語特別教育 3

コース目標：

- ・様々な分野の文章を目的に応じて的確に読めるようになる。
- ・読んだこと、聞いたことに対する自分の意見を効果的に伝えられるようになる。
- ・情報を収集・整理し、口頭発表をしたり、レポートを書いたりできるようになる。

日本語特別教育漢字コースの概要は 1、2、3 のレベルで共通（表 23）、目標は漢字数が異なっている（表 24）。

表 23 日本語特別教育漢字コースの概要

コース概要：日本語特別教育 漢字 3 の修了時に、大学生としての必要な漢字語彙力の基礎が身につく、自律学習ができる。

内容：授業と自律学習の組み合わせで、それぞれ適切な進度で漢字学習を進める。

成績：期末試験 40% 平常点（タスク・宿題、クイズ）60%

表 24 日本語特別教育漢字コースの目標

日本語特別教育 漢字 1

コース目標：漢字約 600 字およびその漢字を使った語句の読み書きができるようになる。

日本語特別教育 漢字 2

コース目標：漢字約 1100 字およびその漢字を使った語句の読み書きができるようになる。

日本語特別教育 漢字 3

コース目標：漢字約 1600 字およびその漢字を使った語句の読み書きができるようになる。

3. 教科書など

日本語特別教育プログラムでは、市販の教科書を使用していない。日本語特別教育は上級コースと同様、新聞、雑誌、新書、単行本などの抜粋を使用し、読解や作文指導のための練習問題、口頭発表指導の教材などを自作している。漢字指導は、漢字の自学用教科書、学習の達成を見るためのワークシート（クイズと呼ぶ）をセットで開発し、使用している。日本語特別教育 1 の読解の読み物一覧、日本語特別教育 2 のフィードバックポリシーと教材例、日本語特別教育 3 の授業例として資料を参照されたい。コアのコースでは授業用配付資料のほかは、学生自身によるレジュメと発表によって授業を進めている。

4. 授業の流れ

日本語特別教育のコースの授業の流れは、基本的に上級のコースと相似しており、定式化された授業の流れは定めていない。コース担当者が授業内容に合わせてスケジュールとしてデザインしている。漢字コースの授業の流れは 1、2、3 の間で定式化しており、どのコースも基本的に教師による簡単な漢字の知識についての講義と自学した漢字の習得度を測るワークシートの自習、簡単な調べ学習の発表によって構成している。コアのコースは、10 コマの授業の 7 割を日本に関する調べ学習の発表にあて、3 割を講師による講義に充てている。

日本語特別教育基礎科目

田中 和美

(1) 授業の流れと内容

日本語特別教育基礎科目は、9月入学の第1言語／継承語系の4年本科生全員に必修とし、初年次教育の目的を持って制定された。入学時のプレースメントテストで、日本語特別教育や日本語特別教育漢字のクラスを免除された学生でも基礎科目はとらなければならない。授業内容としては、最初の数回は全体で基本的な事項の講義（原稿用紙の書き方、メールの書き方、情報収集検索方法、日本語の表記についてなど）があり、その後は15名前後の3つのセクションに分かれて、日本についての基礎的な知識を学生が分担して発表する。情報を的確に収集すること、適切な態度で人前で話し知識を伝えることを発表で求め、さらに聞いたことをノートに取り、コメントシートを記入し、大学で学ぶことの訓練を主眼とした。2013年秋学期に第1回目を開講し、その反省点を反映させた2014年度のスケジュールを参考に記す。

	授業	担当	内容
1 9月9日	オリエンテーション 全員	田中	SpJのオリエンテーション、原稿用紙の書き方、発表の 説明、セクション分け、グループ分け
2 9月16日	講義 全員	田中	発表の要領、各セクションでテーマ決定（20分） 図書館レクチャー（45分）；検索方法、
3 9月23日	祝日		休講
4 9月30日	モデル発表 全員 3セクション	田中 尾崎	発表&レジュメのモデル：発表10分+Q&A5分x2(35分) 各セクションでメールの書き方（10分）=>宿題 発表についてやり方等確認（15分）
5 10月7日	発表1 3グループx5人	セクション	（発表15分+Q&A5分）x3グループ 観光、防災、食糧
6 10月14日	発表2 個人x4人	セクション	（発表10分+Q&A5分）x4人 人口、気候／国土、暦／慣習
7 10月21日	発表3 個人x3人	セクション	（発表10分+Q&A5分）x4人 日本史、伝統芸術
8 10月28日	発表4 個人x4人	セクション	（発表10分+Q&A5分）x4人 教育、宗教、科学技術、サブカルチャー
9 11月4日	発表5 個人x3人	セクション	（発表10分+Q&A5分）x4人 政治、法律、労働、産業
10 11月11日	全員	田中	群読発表

(2) 学習評価

学習評価は、週1コマの授業のため中間テストを行わず、期末試験 50%、発表 30%、平常点 20%とした。

(3) 課題

日本語特別教育基礎科目は9月新入生のうち、第1言語／継承語系の4年本科生全員に必修である。学生による口頭発表時のセクション分けはレベル別ではなく縦割りとしたため、日本語力の差は否めないことを前提として、漢字の読み書きは不問とし、配布物の漢字にはルビを振った。しかしながら日本語力の弱い学生が期末試験で芳しい成績が取れなかったという結果となり、日本語力で不利にならないような工夫と配慮が求められる。以下は本コース開始2回目にあたる2014年度のコアコースで実践した改善点と、更なる検討が必要な課題である。

- ・TAを各セクションに配置した。機材の設置、配布物の配布・回収、それにタイムキーピングを依頼し、教員は学生の発表に集中できるようになった。今後は発表内容の充実を図るべく指導を考えていかなければならない。
- ・教員がモデル発表を行い、学生達にクラスで要求していることを例示した。この際にICUで用いられているコメントシートをもとにしたコメントシートに記入させた。その内容や書き方などのフィードバックをして返却し、その後のコメントシート記入サンプルとした。発表を聞き取り、理解する力に差があるため、個別指導などでフォローすることを考えていく必要がある。
- ・個人発表の前にグループ発表を1回設けた。セクション内での協働作業を推進することで、多様性を実感し、それぞれの強みを見つける機会と考えている。今後はクラス、セクション内での動機付け、積極的に授業に参加する態度、またお互いから学習するということを促進する工夫が必要である。

日本語特別教育1 報告

小澤 伊久美

(1) 授業の流れと内容

このコースは週5コマと個別指導1コマの6コマのコースで、個別指導以外の5コマのうち1コマは書き方の指導に充て、残りの4コマは読解や話し方の演習に充てた。各コマの内容は表1、表2の通りである。

表1 授業内容（中間テストまで）

	火	木	金
提出物	[作文]	[読解予習シート]	[読解課題]
2限	読解クイズ 読み物についてのディスカッション	読解（精読） *速読も随時実施	
3限	話し方（待遇表現・プレゼンテーション）		
4限			書き方
5限			個別指導

表2 授業内容（中間テスト以降）

	火	木	金
提出物	[作文]		[読解課題]
2-3限	読解クイズ 読解とディスカッション	読解とディスカッション	
4限			書き方
5限			個別指導

中間テストを境に火、木の4コマの配分を変え、中間テスト前は待遇表現を意識して話す練習をしたりプレゼンテーションの仕方について練習したりする時間を取り、中間テスト以降はその時間を読解に充て、読み物の分量を増やす形を取った。

読解で扱った資料は、学生に身近な話題について筆者の心情などが書かれたエッセイから始めて、徐々に話題の抽象度や難易度を高めて行き、学期後半には社会問題についての解説や主張が書かれた文章（新聞記事）を取り上げた（参考資料を参照のこと）。読み方は、キーワード・段落の要点・全体の構成を考えながら精読することを基本とし、毎週ではないが、速読をしたり関連する話題の動画を視聴したりする活動も取り入れた。中間テスト以降は意図的に同じトピックについて複数の読み物を読む方式を採ったがそのことによって語彙の拡張ができ、深く考えることを促す形が取れたように思う。

そして、精読を受けて、自分の意見や感想を話し合ったり、意見文を書いたりした。書き方の時間には、モデルとなる文章を提示し、表現なども導入した上で書くこととした。全ての作文は教師のフィードバックを受けて書き直させた。取り上げたのは、「正書法、書き言葉と話し言葉、ねじれ文、段落分け、接続表現、定義文、比較文、手順の説明、あらすじ説明、簡単なレジユメの書き方、ワープロの書式設定の仕方」である。

また、授業外の課題として、各自が関心を持つ小説・物語を読むことを義務づけ、その作品の選定動機・あらすじ・感想を口頭発表およびレポート（800-1000字程度）にするという課題を課した。

(2) 学習支援の方法

個別指導で読解の宿題や作文などのフィードバックを行った。学生とのコミュニケー

ションは moodle 等のオンラインのツールやメールも活用した。特に読解については、日本語力・漢字力の差を補うために学生が必要に応じて取捨選択して使用できる読解本文（総ルビ版とルビなし版）や単語リスト（読み方のみ提示）を用意したが、それらは moodle に載せる形を取った。

読解問題の解答や書き方の課題の作文に対して、よい文やよいまとめ方の箇所にはその旨を書いて示し、読み取りが間違っているなど再考すべき箇所や文法や漢字の誤りには誤りの種類のみ符号を決めて教示した。指摘した点は、個別指導時に話し合い、問題点がクリアできるまで書き直しをするようにした。間違いを指摘されるだけでは、どのように直したらよいかわからない学生も少なからずいたこと、1人1人の問題が大きく異なることから初めて履修する日本語のコースである本コースで丁寧に個別指導したことは効果的であったように思う。

個別指導の時間が1コマあったが、上記のように個別に対応するためには時間が足りなかったため、中間テストまでは金曜日5限以外に各自10分ほど週に1度の個別指導に来ることを全員に義務づけた。中間テスト以降は、テストの結果を踏まえて個別指導の必要性を各自と相談した上で必要性が認められた7名（約1/3に相当）のみ来る形を取った。

(3) 学習評価

JLPの規定に従い、期末試験40%、中間テスト20%、宿題・タスク・クイズで40%とした。期末試験と中間テストの内容は、初見の読み物の読解と作文とし口頭発表やレポートはタスクに含めた。

(4) 課題

学習意欲があり努力をしても期待したスピードでは日本語力が伸びなかった学生が数名いた。学期終了時に、学期開始当初と比べて日本語力は伸びているが、次のレベルである日本語特別教育2で学ぶのに困難を覚えることが予想された。このことは、1年間に段階を追って1・2・3の三つのコースを履修していくことが難しい学生がいるという問題だけでなく、日本語特別教育1でも学生間の日本語力の開きが大きく、課題の難易度や量・スピードを考えるのが難しかったことにつながる問題である。しかし、プレースメントテストの得点と本コースで学ぶ困難度とが必ずしも一致せず、秋学期開始時に彼らをどのコースにプレースするべきかの判断材料が不足している。日本語力以外の要因もあるようだが、プレースメントの仕方についてより検討を加える必要があると思われる。

参考資料 読解の読み物一覧

	著者	題名	出典
読解1	華恵	モトイと日本語	『小学生日記』角川文庫、2003年
読解2	中村明	(1) 上司が部下をほめても部下は上司をほめられないわけ (2) 頼むときは「やってもらえる？」と意思を聞く	『日本語の「語感」練習帖』PHP研究所、2013年

読解 3	河合隼雄	(1) 人の心などわかるはずがない (2) 日本人としての自覚が国際性を高める (3) 自立は依存によって裏づけられている	『こころの処方箋』新潮文庫、1992 年
読解 4	秋山仁	スケジュール作成問題—3人でやるより2人のほうが早く終わる？ 兄弟同士の骨肉の争いを避けるために	『誰かに解かせたくなる算数・数学の本』幻冬舎文庫、1999 年
特別	谷岡一郎	表現と誘導 ～見出し～	『データはウソをつく——科学的な社会調査の方法』ちくまプリマー文庫、2007 年
読解 5 「20 年、東京五輪開催」		20 年五輪 開催決定 —— 東京、総力戦で圧勝、会場整備に 4500 億円 東京五輪、「期待が大きい」74% —— 景気回復願ひ、政治に不安 (サーベイ) (耕論) だから東京オリンピック——開沼博さん	2013/09/09 日本経済新聞 夕刊 2013/09/30 日本経済新聞 朝刊 2013/09/12 朝日新聞 朝刊
読解 6 「図書館の未来」		(耕論) 図書館の未来—— アントネッラ・アンニョリさん (耕論) 図書館の未来—— 高橋聡さん (クローズアップ) スタバ併設、私語 OK「市立 TSUTAYA 図書館」の集客力——佐・武雄市、開業から半年	2013/09/11 朝日新聞 朝刊 2013/09/11 朝日新聞 朝刊 2013/10/5 日本経済新聞 電子版
読解 7 「新技術と街作り」		ビッグデータで街づくり、日本 IBM など、渋滞緩和に活用、東京五輪、再開発にらむ 自動運転で安全競う、ITS 世界会議、展示始まる、ホンダ、開発車を公開 車と IT 結ぶ街づくりを——日本の技術力、世界に示せ (中外時評)	2013/10/06 日本経済新聞 朝刊 2013/10/15 日本経済新聞 夕刊 2013/10/13 日本経済新聞 朝刊
読解 8 「情報を守る」		(社説) 情報を守る 盗聴国家の言いなりか	2013/10/31 朝日新聞 朝刊

日本語特別教育 2 報告

鈴木 庸子

(1) 授業の流れと内容

このコースは週 3 コマと個別指導 1 コマの 4 コマのコースで水曜日 1 限に精読、2 限に書き方、金曜日 1 限に速読と話し合いという流れで行った。精読のための資料は複数の文化の間を歩き来して生きる人物によるエッセイや報告、『日本の論点』など時事問題について対立する意見を扱う意見文、調査報告書を扱った。速読では新聞の教養的な解説記事で「身近なもの→青少年向けに書かれたもの→一般向けのもの」と少しずつ難易度をあげるように工夫した。

書き方は『文章トレーニングノート』(第一学習社)等から抜粋して使用した。トピックは「正書法、書き言葉と話し言葉、ねじれ文、文のつながり、呼応、誤用」で、演習

を中心とした授業である。その成果の集大成のため期末課題として「2013 日本の論点 100」から記事 1 編を選び、口頭発表およびレポート執筆を課した。

(2) 学習支援の方法

個別指導で読解の宿題のフィードバックや口頭発表のフィードバックを行った。学生とのコミュニケーションはメールで行い、moodle 等のオンラインのツールを必要に応じて利用した。主に、補足教材の提示などの利用が多かった。

読解問題の解答や書き方の課題の作文に対して、よい文には青、文法や漢字の誤りにはオレンジ色のマーカーで印をつけ、文のねじれや文章構成の問題点など、直接話すことで効果的に改善が望める部分は緑のマーカーで印をつけて個別指導時に話し合い、再提出を促すようにした。この方法は学生が自己のすぐれた点と改善すべき点の両者を視覚的に把握できる利点がある。

(3) 学習評価

JLP の規定に沿い、期末 40%、中間 20%、宿題とタスク 30%、課題 10%とした。4 週目に組み込まれている中間テスト時点で、初見の読解問題を課するのが難しいため、達成度を見るテストを含めた。

(4) 課題

秋学期と冬学期の 2 回開講されるが、それぞれで課題が異なる。秋は、日本語力の中で特に漢字力に差がある学生が同時に受講するため、評価にあたって「漢字力を排した読解力」を問う必要が出てくるが、それは必ずしも容易ではない。漢字力の高い学生が自分の力を過信し、かえって読解力に伸び悩むケースも見られた。冬学期は、日本語特別教育 1 の続きのコースとして開講されるため、秋学期に続き、レベル差の大きさが課題となる。また日本語特別教育 1 の終了時点の日本語力が、秋学期の始まり時点における日本語特別教育 2 の日本語力には不足する面があり、授業内容は秋学期よりもきめ細かい指導、たとえば、同レベルの読み物を扱う場合でも、単語解説や読み方のストラテジーの指導などのスキャフォールディングが必要である。そのため、時間不足の状況が避けられない。

学習内容に関しては、日本語 J8 などのレベルで扱う書きことばの文型表現について、体系的な指導が必要である。そのため、文章表現や文型表現のシラバスの開発が必須である。

資料① 「フィードバックのポリシー」

SPJ2
読解宿題のフィードバックポリシー

◎→とても良い解答である。
 ✓□よい解答である。まちがっていない。..
 △□何か足りないところがある。..
 ×□まちがっている。かんちがいしている。..
 ⇒テストのときは、△と×の場合に点数がつかれます。..
 水色のマーカー□とてもよい文である、またはとてもよい内容である。..
 オレンジ色のマーカー□「書き方」で勉強することのまちがい*。
 緑色のマーカーで書いたメモ□個別指導の時間にワープロで直し、moodleから再提出する。..
 ★「書き方」で勉強することのまちがい：..
 □□□①話し言葉・書き言葉、②文のみだれ□□□③読点（、）の場所/文の長さ..
 □□□④接続詞（せつぞくし）の使い方□□□⑤その他。..

資料② 「きめ細かいスキヤフォールディングを入れた教材例」

SPJ-2 解問と話しあい？
日本女性の社会進出 なぜ遅れているの？ (www.asu.ru/ja)

キーワードの類似・・・() は関係する言葉

女性の社会進出 「女は家庭」の美徳 職業女性 男女格差 経済的男女平等 政治参加 健康と美容 教育の機会 役割分担の意識 長時間労働	家事や子育ての実績 キャリアの中断 委員会参加 経営者 女性の雇用 産休年（給与保障制度） 人口減少社会 若い労働力 高齢者
---	--

1. 文脈は5つの質問と、その答えで構成されている。5つの質問の前に各章の①をふりなさい。

2. 5つの問いは、()にある「内容を表す言葉」で示すとすると、どれも適切か、()に書きなさい。また、長所短所なサブタイトルを考えて()に書きなさい。最終的提案者になったつもりで。

3.

解決策	各章の課題	各章説明	社会的背景	理由	論証説明
① ()	【]	【]	【]	【]	【]
② ()	【]	【]	【]	【]	【]
③ ()	【]	【]	【]	【]	【]
④ ()	【]	【]	【]	【]	【]
⑤ ()	【]	【]	【]	【]	【]

4. ①-⑤の5つの内容を、3つのかたまりに分けなさい。記事に正確書き込み。

5. 次のページは、3つのかたまりとあとの。 () に適切なキーワードを書きなさい。

かたまり

かたまり	まとめ
1	国際機関(世界経済フォーラム)によると日本は2013年最新の() 指数が世界136か国中105位であった。昨年より4つ順位を下げ、日本より順位が低い国は女性の行動に制限のあるイスラム諸国がほとんどである。この指数は、経済的な()、() 参加、健康と美容、教育の()の分野で男女の格差を測っているが、日本は特に経済と政治の分野で()が遅れている。
2	日本で格差が大きい理由は、「男は仕事、女は家庭」という() 男性の意識が強いこと、長時間労働が日常化しているために()の負担が大きい女性が多量に存在していることだと言われている。
3	安倍首相は経済成長戦略として女性の活躍を進めると表明し、()も女性の活躍促進の活動始めた。安倍首相は今まで女性の量質に消極的だったが、日本は()になって労働力が減り、女性も高年齢も労働力として活用せざるを得ない状況になったからである。

5. 次の () に適切な言葉を書きなさい。

(1)日本の出生率は1990年の中14% だった。

(2)2006年に消費が停滞して、() 景気の停滞になった。

(3)順位が105位というのは、先進国の中では()だ。

(4)ジェンダー・ギャップは5つの()で男女格差を測る。

(5)2010年の経団連で女性役員数の増加は、()が9%になったことが理由だ。

(6)女性が子育てしながらキャリアや経験()は無難ではない。

(7)首相は2020年までに高齢者地位に在る女性の割合を30%にする目標を()。

(8)人口減少社会では、()みんなが持てる力を()しなければならぬ。

(9)社会は変わらざるを得ない。

日本語特別教育3 報告

尾崎 久美子

(1) 授業の流れと内容

日本語特別教育3は、次のような流れで授業数3コマを構成した。

1-2コマ目（火曜日朝の連続したコマ）：読解
3コマ目（金曜日午後の1コマ）：書き方

火曜日の読解授業では、速読と精読を行なった。速読では「天声人語」や新聞記事等を扱い、教師主導の授業だけでなく、学生主導の授業（各自記事を選択、15分程度の口頭発表をする）を持った。精読では、『レポートの組み立て方』（木下是雄著、ちくま学芸文庫、1994年）『高校生のための現代思想ベーシック ちくま評論入門』（岩間輝生他編、筑摩書房、2009年）から数篇、「大学入学者選抜大学入試センター試験」の国語「現代文」で出題された文章等を使用。速読でも精読でも内容理解をはじめ、要約、文の構造の把握、語彙・慣用句・諺や時事問題の調べ発表等を行なった。また精読授業の最後には、古典に親しむ目的で夏目漱石の『坊っちゃん』を取り上げた。『坊っちゃん』は1906（明治39）年の初出本文（雑誌『ホトトギス』に掲載されたもの）を用い、内容を理解し、語彙や時代背景、仮名遣いや漢字の字体を学んだ。（『坊っちゃん』を利用した授業については、参考資料①を参照のこと。）

金曜日の書き方では、要約文、意見文、提言文等を扱った。授業では小グループでの意見交換の後、各自の意見をまとめ文章にした。その際、文法・表記・表現や客観的で説得性のある文章の書き方を学ぶと同時に、ワープロを使用した書式設定や特殊記号の使い方等を学んだ。学期の中盤からは、ブックレポートや学期末レポートに向けて「レジメの書き方」「引用文の書き方」「参考文献の書き方」「レポートで使える表現」等の授業を行なった。

読解と書き方の授業の他に、ブックレポートのプロジェクトを行なった。これは学生が各自興味のあるテーマで新書を1冊選び、内容を口頭で発表し、そのテーマに関連のあるトピックで更に調べたことを学期末レポートにまとめるという流れである。（ブックレポートから学期末レポートへの流れについては、参考資料②を参照のこと。）

(2) 学習支援の方法

上記3コマに加えて、個別指導の時間を設け、授業の復習や質問への対応のほか、学生の個別の弱点を克服する作業などを行った。また、学期中に2回、長い個別指導の時間をもち、1回目はブックレポートの口頭発表のための面談（書籍の内容確認と発表の準備）、2回目は学期末レポートのチェック（ドラフトの添削を示し改善する）をした。

(3) 学習評価

評価は JLP の方針に従い、クイズ、中間テスト、期末試験、宿題・タスクで評価した。クイズは学生主導の授業で扱った新聞記事から漢字の読み方クイズを行なった。中間テスト、期末試験の試験内容は初見の読み物の読解と作文（要約文や意見文等）とし、学期末レポートは期末試験の評価に含めた。宿題・タスクは、読解のワークシート・口頭発表・作文・ブックレポート等である。

(4) 課題

使用教材の充実が課題の一つである。教材に日本語特別教育の 1 から 3 の流れを作り、統一したフォーマットで準備すること、普遍的に使用できる教材と、ある程度の期間で入れ替えが必要な教材（例えば時事的な内容のものなど）を分け、内容も文体も多様な種類の教材を蓄積し活用できるようにすることが必要であろう。

また、最大の課題は学期ごとに異なるコース運営である。入学時の日本語能力、日本事情や文化的背景の理解度に学生によって大きな差があるため、同じコースであっても秋学期に開講する日本語特別教育 3 のコースと冬学期と春学期では、学生に対して異なる対応が要求される。同じコースのレベルを保ちつつ各学生に対する指導を行ない、個々の到達目標の設定に工夫が必要となろう。

参考資料 ① 日本語特別教育3 【 『坊っちゃん』を原文で読む授業 】 の流れ

① 夏目漱石、『坊っちゃん』について簡単に調べる

⇒ 授業で調べてきた結果を小グループで確認し、情報を交換

調べる内容 : 漱石の略歴、代表的な作品名

漱石については、「その他、わかったこと」として、他の学生があまり知らない
だろうと予測されることを独自に調べてくるように言う
『坊っちゃん』の登場人物について

② 『坊っちゃん』の解説文を読む

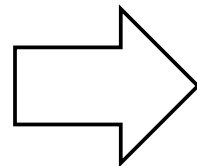
⇒ 『坊っちゃん』の集英社文庫版の巻末解説のうち、ねじめ正一「鑑賞——正義と愛」を読み、
『坊っちゃん』に描かれている「正義」について学ぶ

③ 『坊っちゃん』の原文を読む…その1

⇒ まず教師がモデル授業をする

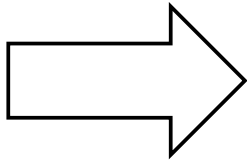
押さえるポイント :

内容
特殊な語彙（後架＝トイレなど）
その他の語彙（蝦蟇口、金鏢、越後の笹飴など）
時代背景（当時の1円はいくらかなど）
仮名遣い（現代仮名遣いとの対照）
漢字の字体（現代の標準字体との対照）など



④ 『坊っちゃん』の原文を読む…その2

⇒ 学生が1ページずつ分担して、教師と同じように授業をする



読解学習シート 『坊っちゃん』 SJ33

名前 _____

6月10日からの授業では夏目漱石の『坊っちゃん』に閉係する短い文章と、『坊っちゃん』の冒頭部分を原文で読みます。

◆ まず6月10日までに、図書館やインターネットで次の点について調べ下の表を埋めてください。

① 『坊っちゃん』の作者、夏目漱石について

生没年	年 月 日～ 年 月 日
1890 (明治 23) 年	[] に入学
1893 (明治 26) 年	大学卒業後 [] になる
1895 (明治 28) 年	[] に勤める
1896 (明治 29) 年	[] に勤める
[]	[] と結婚
1900 (明治 33) 年	[] に留学
1906 (明治 39) 年	『ホトトギス』に『坊っちゃん』を発表
1907 (明治 40) 年	[] に入社
代表的な作品名	
その他、わかったこと	

② 『坊っちゃん』の登場人物について

坊っちゃん	主人公。大学卒業後、[] で [] になる。
清	坊っちゃんの []
山嵐	[] の先生
赤シャツ	[] 先生
野だいご	[] の先生
うらなり	[] の先生
マドンナ	うらなりの [] だったが、赤シャツと []

← 1906 (明治 39) 年 4月発行の雑誌『ホトトギス』に発表された初出本文

仮名遣い・漢字の字体対照表
(授業はこれを見せながら行う)

親譲り	親譲り	此	この
無鉄砲	無鉄砲	答へた	答えた
小供	子ども	貰う	もらう
して居る	している	刃	刃
小学校	小学校	切れさう	切れそう
抜かす	抜かす	此通だ	このとおりだ
冗談	冗談	切り込む	切り込む
出来まい	出来まい	幸	幸い
爾来	爾来	然	しか

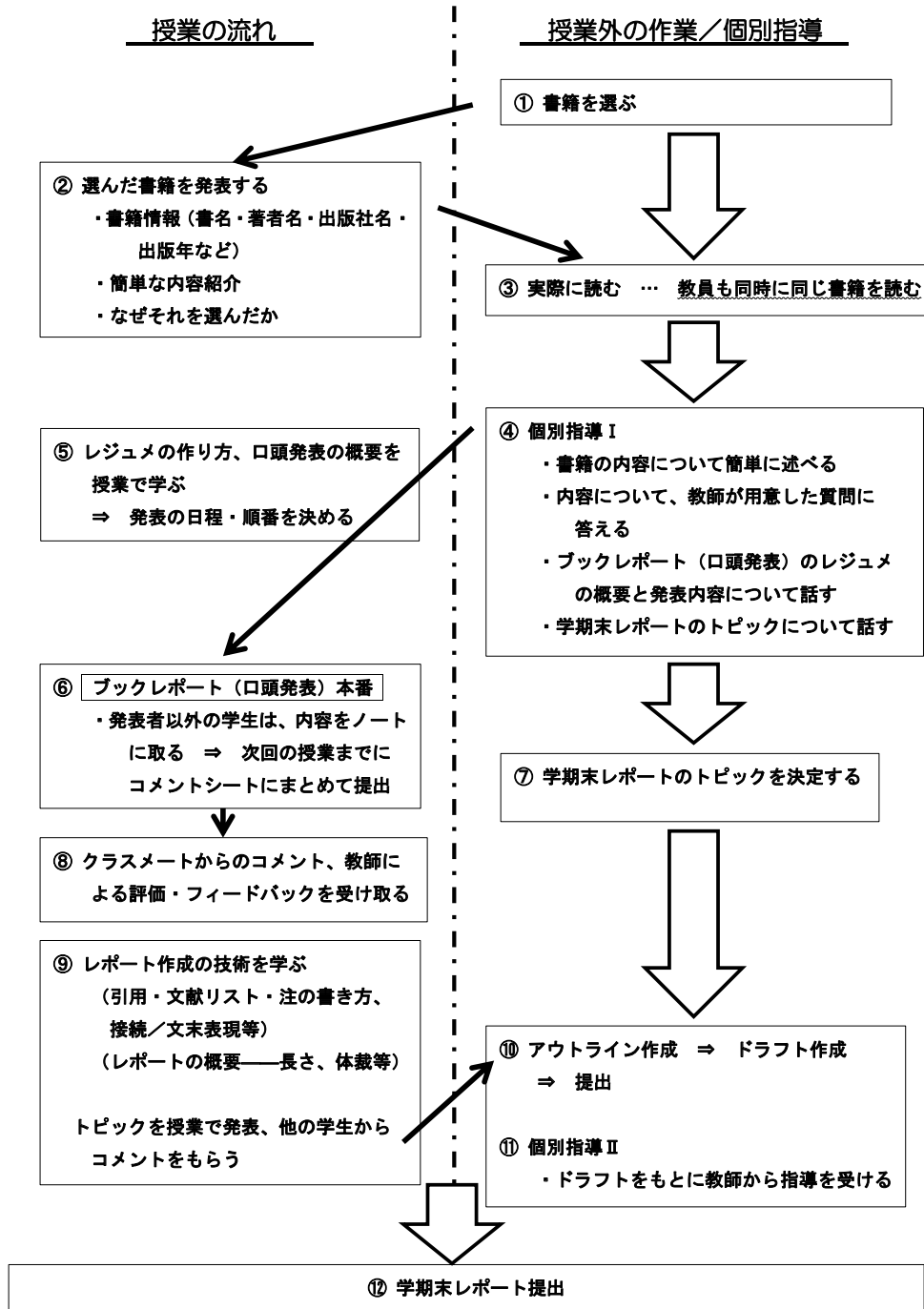
坊っちゃん

夏目漱石

親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりして居る。小学校に居る時分學校の二階から飛び降りて一週間癡癡を抜かした事がある。なぜそんな無間をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら同級生の一人が冗談にいくら威張つてもそこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やい。と囃したからである。小便に負ふさつて歸つて来た時や、ちが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから此度は抜かすに飛んで見せますと答へた。親類のものから西洋製のナイフを買つて寄贈を及日に贈して友達に見せて居たら一人が光る事が切れさうもないと云つた。切れぬ事があるか何でも切つて見せると受け合つた。そんなら君の指を切つて見ろと注文したから何だ指位此通だと右の手の親指の甲をはずして切り込んだ。幸ナイフが小さいのと親指の骨が堅かつたので今だに親指は手に付いて居る。然し創痕は死ぬ迄消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き盡すと前上がりに脚か許りの菜園があつて其中に栗の木が一本立つて居る。是は命より大事な栗だ。實の熟する時分は起き抜けて背戸を出て落ちた奴

坊っちゃん
九巻 七章 附 録



新書を選ばせる際は …… なるべく新しいものを選ばせる
自分のレベルに合ったものを選ばせる
(ジュニア向けはダメ)

ブックレポートのために選んだ本 5.03 2014年春

名前: _____

著者:	<input type="checkbox"/>
本のタイトル:	<input type="checkbox"/>
出版社:	<input type="checkbox"/>

選んだ書籍を記入する紙

なぜ新書か? …… 時事的な話題が取り上げられている
入門者向けから専門的なものまである
自分の興味がある分野のものを選ぶことができる (自分の専攻をふまえて)
⇒ 今後の大学生活で活用できる語彙を増やすことができる

自分で探せる目的は …… 自分の日本語力を客観的に計る機会となる
本の探し方が学べる (図書館や書店、古本屋などの活用)

ブックレポートについて 5.03 2014年 春学期

【クラスの進め方】

①発表者はレジュメを配付し、口頭発表をする。口頭発表には以下の点を含める。

- ◆ 著者とテーマ (簡単な紹介)
 - ・著者についての情報
 - ・テーマの背景
- ◆ 内容
 - ・全体として著者が言いたいのか。
 - ・その論の根拠としてどのような議論をしているか。
- ◆ 考察
 - ・内容の以上2点について、発表者はどのような意見・感想を持ったか。

②発表者以外の学生はレジュメを参考にしながら発表を聞き、コメント用紙に書き込む内容のメモをとる。

③発表に基づき、全員で建設的な議論をする。

* 以上の①～③で、約15分とする。発表者以外の学生は、コメント用紙に記入し6月8日に提出すること。

* 発表の際、OHCのみ使用可能。コンピュータや携帯電話の画面を見せるなどは不可。

【レジュメに含めること】 * レジュメの書き方はこの紙の裏を参考してください。

- ◆ 書誌情報 (著者名、書名、出版社名、出版年)。
- ◆ テーマ。
- ◆ 内容。
 - (簡潔書きにする。まとめた方として、章ごとに要約する方法もあるが、今回は、著者が最も主張したい点を中心に、内容を考えて再構成すること。)
- ◆ 考察 (文章で)。

* レジュメの長さはA4の用紙で1～2ページとする。

* 発表日にはレジュメを入数分 (自分+自分以外のクラスメート7名+教師1名で、合計9枚) 用意する。

日本語教育研究部 ブックレポート コンポートシート 名前: _____

発表者	発表内容	評価	備考				
発表者1	よく説明してあった	3	4	3	2	1	あまり文章がなかった
発表者2	よく説明してあった	3	4	3	2	1	あまり文章がなかった
発表者3	よく説明してあった	3	4	3	2	1	あまり文章がなかった

コメント、感想をここに記入してください。

⑥の発表後に記入するコメントシート

⑤の授業で配付する資料

レポート評価表 2014年 春学期 名前: _____

内容	読解性があるか、論理的か	1	2	3	4	5
構成	構造的な見出しや段落分けが適切か	1	2	3	4	5
	論旨の整理が適切か	1	2	3	4	5
論文	論点の整理が適切か	1	2	3	4	5
	文のつながりよいか	1	2	3	4	5
スキル	文法は正しいか	1	2	3	4	5
	文字 (漢字を適切に) や英訳は正しいか	1	2	3	4	5
その他	論旨の整理が適切か	1	2	3	4	5
	字彙・句法が適切か	1	2	3	4	5

35

学期末レポートの評価表

日本語特別教育 漢字 報告

尾崎久美子・小澤伊久美・鈴木庸子

日本語特別教育プログラムのうち、漢字教育は週1コマ、1単位のコースとして1、2、3の3レベル、3学期にわたって行うコースである。9月にプレースメントテストを行って漢字力を判断し、基本のコースとは独立して学生を1、2、3プラス免除の4レベルに振り分ける。1に振り分けられた学生は冬学期に2、春学期に3のレベルに進み、2に振り分けられた学生は冬学期に3のレベルに進む。3のレベルに振り分けられた学生は秋学期のみで終了する。4年本科生の場合、3のレベルまで修了することが卒業の要件となる。

(1) 授業の流れと内容

授業の流れは、1、2、3の3レベルとも、次の通り70分を3段階に分けて行う。

- a. 学生による調べ学習の発表 (1人7-8分×3名程度)
- b. 教師による講義 (15-20分)
- c. 自学してきた漢字の到達度チェックを自己ペースで行う。(30-40分)

a. の調べ学習発表では、四字熟語、慣用表現のリストから一人2、3項目を担当し、意味や使い方を説明する。b. の講義では漢字の字構成(部首を含む)、熟語の語構成、同訓異字の書き分け、類義語・反義語などを、定められたシラバスにそって教師が解説する。c. の到達度チェックは、与えられた教科書にそって自学した漢字のテスト(クイズと呼んでいる)を自己ペースで行うものである。a. と b. は状況によって順序が逆になることもある。

使用する教科書は自作したもので、常用漢字から、以下のア〜クの資料等を基準に1600字を抽出、配列した。

- ア. 常用漢字表(2010年)
- イ. 教育漢字(学年別漢字配当表)
- ウ. 日本漢字能力検定
- エ. 旧日本語能力試験(1級 - 4級)
- オ. 日本語能力試験(N1 - N5)
- カ. 徳弘康代編『日本語学習のためのよく使う順漢字2100』(三省堂、2008年)
- キ. Inter-University Center for Japanese Language Studies, "A Study System for International & Advanced Learners KANJI IN CONTEXT 中・上級学習者のための漢字と語彙", The Japan Times, 1994.
- ク. JLPの教員による案

1 課の漢字数は 25 字で、全 64 課の構成となっている。1 のレベルは、学年別漢字配当表を基にすると小学 1 年生から 5 年生を中心としており、主に概念シラバスを基本に構成した。2 のレベルは、学年別漢字配当表の 5 年生から中学 1 年生を中心に主にトピックシラバスで配列した。3 のレベルは、中学生の漢字を中心に字構成のまとまりで配列した。3 レベルで扱う漢字は以下の通りである。

日本語特別教育 漢字 1 (600 字)

第 1 課	一二三四五六七八九十百千万円日月火水木金土曜人本何
第 2 課	時分年週今毎半間朝昼晩夜夕午前後明秒昨来末先生学校
第 3 課	上下中右左内外以東西南北図館堂室部屋番号場所教階段
第 4 課	公園郵便局銀病院店駅社電車物建道路地鉄線信交差点角
第 5 課	私父母兄弟姉妹男女子友家族親達名様全仕事員用自会住
第 6 課	口目耳手足頭体顔首指声背元気赤青黒白色春夏秋冬季節
第 7 課	行帰食飲寝起休読書見聞話思出入切作使知持待歩走動止
第 8 課	大小多少高安低暗重軽近遠早遅広新古長短細大若速痛弱
第 9 課	山川田石力糸竹雨貝門方米弓矢言王玉里刀馬羊心主衣戸
第 10 課	漢字文法宿題問質答例授業練勉強国語英習欠席試験忘怠
第 11 課	立座貸借返消付開閉乗降引押売買始終働死考泳着進取洗
第 12 課	天候風雲晴雪温度予報暑寒暖冷蒸光水熱初桜梅陽星宇宙
第 13 課	個枚回代冊台件才億兆約算計割品組側倍羽片両第級化各
第 14 課	世界京州都府縣市町区村丁坂橋郡官庁商街横断停空港船
第 15 課	限期提発表科単位同意講義研究者卒成績氏申記規則守受
第 16 課	浅深固丸快正優危難簡静必要利不無非最の有好特別得央
第 17 課	魚肉牛鳥飯野菜果麦豆卵酒茶油味塩洋和料理材皿具残形
第 18 課	趣音絵映画歌劇演旅運転登散写真興祭仏寺神服式役曲
第 19 課	専経済営政治薬美術歴史育数技医際宗関係種類共策民工
第 20 課	呼送決続集伝急遊合通置落並向願連過調選助配失飛負機
第 21 課	感情笑怒泣喜困悲苦楽悪幸努満活常識責任独身比変直当
第 22 課	議論参加賛反対説解相談他平等注因結由流省定次実順面
第 23 課	犬象虫草花葉枝幹根植松海命陸林森谷湖池島原岸波然河
第 24 課	状態完景価値養基務律判認束否現未去昔紀版想紙客武士

日本語特別教育 漢字 2 (500 字)

第 25 課	証記録希望確翌更毒液險禁輪照測器管礼拝健康視検査帳
第 26 課	込資示編標準列余印刷設覧章保護辞典訳吹版縮幅存拵打
第 27 課	黄改札券精窓刻構案賃臨普往復総蔵境久豊違穴慣恐能備
第 28 課	観絶浴泉雷委帯徒樹迎緑宮旧博沿般在歳祝舍留依頼仲像

第 29 課	放弃烧炭婦鮮給与勤費額支詳胃腸眼齒鼻産皮兒剂处承頂
第 30 課	震災害避訓裝倒移寄層破看板域模警素防署救壞協応突操
第 31 課	富属箱遺汚均巖岩灰積造爆良農適源貴跡描創影響越敬愛
第 32 課	型勝恵系統職抱師巨条可性暮異修涙悩迷老謝筆床庭就離
第 33 課	城盟諸評球宝著群聖息衆複兼誕築採告財求程互致憲戦争
第 34 課	漁収量忙咲敵粉張増芽勞從製雜展減輪距貿易鈺占導械寸
第 35 課	干鏡姿似布裁薄綿毛厚純栄脂肪骨砂糖甘酸乳含衛触傷賞
第 36 課	宅居壁井格倉煙裏踊団眠納机灯奥吸障捨清潔况徑効尺亡
第 37 課	己紹介祖恋彼夫妻婚娘孫君幼童飼貯夢攻誠善恩担我退贈
第 38 課	環燃包再替脱周脈沼辺浜潮畑牧鳴巢航泊渡絡底香浮紅染
第 39 課	幕將軍権昭隊司令兵擊殺被敗宣念領疲援革拳票閣臣党副
第 40 課	摘刊序競容述勸到投振捕途略推句血舌胸腹臟肩髮腰腰筋
第 41 課	墓郷熟欲賀接勢暴圧卷激誌詩貧逃舞拔奏揮徳尊秀福沢盛
第 42 課	察課犯罪届拾探許柔追盜補整疑乱射柱即囤庫払療荷齡訪
第 43 課	除奮仮極至販税率針株混誤腦招功損逆永益供批貨棒志討
第 44 課	秘密沖派肺延磁荒忠唱恥御勇斜仁姓煮湯縦折銅預頂班旗

日本語特別教育 漢字 3 (500 字)

第 45 課	練傾頃頃握掌把乾燥焦驚仰抑叫繼濃淡炎隣瞬還曆惑恒誘
第 46 課	鎖錯丘岳狂狹驅飾尋騷峠漫漫怠默沈滯獲狩猛烈烈獸獄
第 47 課	織絹網綱鋼銳鈍錢鉛帝締皇后陛殿朗朗浪垂睡排俳穀肥孝
第 48 課	丈汗祈析劣維緯偉杯匹軒駐較陣輝載揭携威戒茂芝華繁敏
第 49 課	玄朱紫彩抵抗扞拓括搬掛撮撰措拒搖抽掃揚捩擁搜索擬凝
第 50 課	凡帆屈倔伸喚換召挑挑跳躍桃哀却脚儀犧牲雅邪監濫督
第 51 課	懷悔怪惜怖慘愼憶憎僧憇慰慈募慕嫌謙讓虚戲偽為愚偶遇
第 52 課	寂嘆忌頑朽枯吐喫唆噴墳詰訂誇請誰託諾論訴斥該核嘗罰
第 53 課	侵浸透蓄畜粹粹僚寮瞭癖幣弊偏遍冒帽雌雄鬼魔魅魂
第 54 課	徵微妙覆履妒戾房扇雇顧催是堤又双桑紋絞陪審賠償促捉
第 55 課	契獎勵盤盆辱奪啓哲坊妨豚緣豪嫁媼如姬妥砲胞飽吉凶刈
第 56 課	霧露曇零靈需阻粗唯准稚拙迫拍軟硬堅軌軸輩既慨謀諮
第 57 課	濕潤瀨滴澄濁添滑潛淹沒滅涉涼灣江津浦漂舟俗裕裕墜塗
第 58 課	鯨鷄翼尾篤獻稻穗稿称穩粘糧粒旬殖耕唐辛炊醇腐懸控扱
第 59 課	胴肝胆膜鼓膚膨脅肯聽踐踏襲伺傍債儉伴伏倣倫徑徐衝徹
第 60 課	礎塔埋岐崩赴隆陰隔隱隨陶陳凍棟鍛鍊郊邦摩擦廢棄薦
第 61 課	緩緊緒縛縫紛紺莫裸彈遂遣巡遭貫賢貢購融柄架欄閘闕
第 62 課	封耐忍侍冠寿符簿籍箇範翻歡欧劍刺刑削刺症慮唐晷敷袋
第 63 課	甲乙幾及尽矛盾企免克充吏冗卓奉乏憂了奇圈旨昇皆窒殊
第 64 課	端珍敢幻巧祉孤施赦晶彫執頻积卸陷循挿喪秩匿酷累逸暇

(2) 学習支援の方法

日本語特別教育を受講する学生は日本語を母語または継承語として習得しており、漢字学習に対する動機づけは非常に高いと言える。学生の漢字の習得段階と、総合的な日本語の文法力、文章力、理解力にギャップが認められる場合があり、その場合に漢字コースと日本語特別教育、つまり総合的な日本語力の涵養をめざすコースを別々に受講することで、学生の漢字学習への動機づけに水を差すことがないように配慮した。

漢字学習自体は、自宅での自学自習にまかされる。自学用に、漢字の字形、意味、その漢字を使った頻度の高い漢字語彙、例文を列記した教材を準備してあり、学生は自律的に学習を進めるよう指導されるが、標準的なペースとして1課25字×週2-3課×9週＝500-600字を学んでいく。到達度チェックのテスト（クイズ）では漢字の読みと書きの両方を語彙の単位でテストし、漢字1のコースでは80%、漢字2のコースでは70%、漢字3のコースでは60%の達成度を示せば次の課に進むことができる。

授業中にクイズに記入が済んだら正答の書いてあるプリントを見て自分で採点をし、間違えた問題は、隣の欄に正しく書き直してから教師に提出する。教師はその場でチェックし、字形や間違えやすいポイントなどについて個別に指導する。

漢字の書き方の指導では、無料の書き順を示すオンラインのソフトを紹介している。

漢字コースには、個別指導のシステムが設けられていないが、調べ学習の発表で力の不足する学生にはオフィスアワーを利用して指導を行なっている。

(3) 学習評価

学習評価は、期末試験40%、平常点（クイズ、調べ学習の発表、そのほかの課題）60%である。テスト、試験には、漢字の読み、書き、調べ学習で学んだ事項、教師による講義の内容が含まれる。期末試験は、その学期の学習項目すべてが含まれる。

(4) 課題

漢字を自己ペースで習得していく、という基本構想は、よく機能したと考えられる。ただし、漢字をまったく学習した経験がなく、日本語の総合力のレベルも不足する学生の場合に、自学自習のみによる漢字習得には無理があり、「一、二、三」のような易しい字形のものが多いいえ漢字1のコースで600字を覚えなければならない点にコースデザインとしての不備があり、それが課題として残った。すなわち、漢字1コースの終了時点の漢字力を、秋学期初めの漢字2コースのスタート時の漢字力に合わせる現実的に不可能な学生が出る点を解決する必要が生じている。同様に、秋学期終了時点の漢字2コースの漢字力は、秋学期始めの漢字3のスタート時の漢字力に匹敵しない学生がおり、コース開始時に漢字力が低い学生にとっては、一学期間に目標レベルまで漢字力を上げることが難しいという設計上の問題がある。